

# **CLUSTERPRO<sup>®</sup> X 2.1 *for Solaris***

## **インストール&設定ガイド**

2009.06.15

第1版

**CLUSTERPRO**

改版履歴

版数	改版日付	内 容
1	2009/06/15	新規作成

## 免責事項

本書の内容は、予告なしに変更されることがあります。

日本電気株式会社は、本書の技術的もしくは編集上の間違い、欠落について、一切責任をおいません。

また、お客様が期待される効果を得るために、本書に従った導入、使用および使用効果につきましては、お客様の責任とさせていただきます。

本書に記載されている内容の著作権は、日本電気株式会社に帰属します。本書の内容の一部または全部を日本電気株式会社の許諾なしに複製、改変、および翻訳することは禁止されています。

## 商標情報

CLUSTERPRO<sup>®</sup> X は日本電気株式会社の登録商標です。

FastSync<sup>™</sup>は日本電気株式会社の商標です。

Sun、Sun Microsystems、サンのロゴマーク、Solarisは、米国Sun Microsystems, Inc.の米国およびその他の国における商標または登録商標です。

Linuxは、Linus Torvalds氏の米国およびその他の国における、登録商標または商標です。

RPMの名称は、Red Hat, Inc.の商標です。

Intel、Pentium、Xeonは、Intel Corporationの登録商標または商標です。

Microsoft、Windowsは、米国Microsoft Corporationの米国およびその他の国における登録商標です。

Turbolinuxおよびターボリナックスは、ターボリナックス株式会社の登録商標です。

VERITAS、VERITAS ロゴ、およびその他のすべてのVERITAS 製品名およびスローガンは、VERITAS Software Corporation の商標または登録商標です。

本書に記載されたその他の製品名および標語は、各社の商標または登録商標です。



# 目次

はじめに .....	vii
対象読者と目的 .....	vii
本書の構成 .....	vii
CLUSTERPRO マニュアル体系 .....	viii
本書の表記規則 .....	ix
最新情報の入手先 .....	x
セクション I            クラスタシステムの設計 .....	13
第 1 章        システム構成を決定する .....	15
クラスタシステム設計から運用開始前テストまでの流れ .....	16
CLUSTERPRO とは? .....	18
CLUSTERPRO のソフトウェア構成 .....	19
システム構成の検討 .....	20
共有ディスク方式 .....	20
2 ノードで共有ディスクを使用する場合の構成例 .....	21
4 ノードの構成例 .....	22
CLUSTERPRO モジュール別の動作環境を確認する .....	23
CLUSTERPRO (本体モジュール) のハードウェア構成例 .....	25
CLUSTERPRO Server で推奨するスペック .....	25
Builder の動作環境を確認する .....	26
WebManager の動作環境を確認する .....	27
ハードウェア構成の決定 .....	28
ハードウェア構成後の設定 .....	29
1. ボリュームマネージャリソース及びディスクリソース用の共有ディスクを設定する (ボリュームマネージャ リソースまたはディスクリソース使用時は必須) .....	29
2. OS 起動時間を調整する (必須) .....	31
3. ネットワーク設定を確認する (必須) .....	32
4. ルート ファイル システムを確認する (必須) .....	32
5. ファイアウォールの設定を確認する (必須) .....	33
6. サーバの時刻を同期させる (必須) .....	34
第 2 章        クラスタシステムを設計する .....	35
クラスタシステムの設計 .....	36
運用形態を決定する .....	37
片方向スタンバイクラスタフェイルオーバーの流れ .....	38
双方向スタンバイクラスタフェイルオーバーの流れ .....	39
二重化するアプリケーションを決定する .....	40
注意事項に該当する構成 .....	40
対象アプリケーションについての注意事項 .....	40
注意事項 1: 障害発生後のデータ修復 .....	40
注意事項 2: アプリケーションの終了 .....	40
注意事項 3: データ格納位置 .....	41
注意事項 4 :複数業務グループ .....	41
注意事項 5: アプリケーションとの相互干渉、相性問題 .....	42
注意事項に対する対策 .....	42
業務形態の決定 .....	42
クラスタ構成を設計する .....	43
グループリソースを理解する .....	44

モニタリソースを理解する.....	45
ハートビートリソースを理解する.....	47
ネットワークパーティション解決リソースを理解する .....	48
<b>セクション II           CLUSTERPRO X のインストールと設定 .....</b>	<b>49</b>
<b>第 3 章       CLUSTERPROをインストールする .....</b>	<b>51</b>
CLUSTERPRO のインストールからクラスタ生成までの流れ .....	52
CLUSTERPRO Server のセットアップ .....	53
CLUSTERPRO パッケージをインストールするには.....	54
オフライン版CLUSTERPRO Builderをインストールするには.....	54
<b>第 4 章       ライセンスを登録する .....</b>	<b>57</b>
CPU ライセンスの登録 .....	58
ライセンス ファイル指定によるライセンス登録を行うには (製品版、試用版共通) .....	59
コマンド ラインから対話形式でライセンスを登録するには(製品版).....	60
ノードライセンスの登録 .....	62
ライセンス ファイル指定によるライセンス登録 (製品版、試用版共通) .....	63
コマンド ラインから対話形式でノードライセンスを登録するには(製品版) .....	64
<b>第 5 章       Builder でクラスタ構成情報を作成する.....</b>	<b>67</b>
クラスタ構成情報を作成する .....	68
WebManager を起動する .....	69
WebManager とは .....	69
WebManager がサポートしているブラウザ .....	69
管理用PCへの Java 実行環境の設定 .....	70
WebManager を起動するには .....	70
Builder を起動する .....	71
2ノードクラスタ環境の設定値を確認する .....	72
クラスタ環境のサンプル .....	72
2ノードクラスタ構成情報の作成手順 .....	75
1 クラスタの作成.....	77
1-1 クラスタを追加する.....	77
1-2 サーバ (1 台目) を追加する .....	78
1-3 サーバ (2 台目) を追加する .....	80
2 フェイルオーバーグループの追加 .....	82
2-1 管理用のフェイルオーバーグループを追加する .....	82
2-2 グループ (業務用) を追加する .....	84
2-3 グループ リソース (フローティング IP アドレス) を追加する.....	84
2-4 グループ リソース (ボリューム マネージャ リソース) を追加する .....	85
2-5 グループ リソース (ディスク リソース) を追加する .....	85
2-6 グループ リソース (EXEC リソース) を追加する .....	85
3 モニタリソースの追加 .....	87
3-1 モニタ リソース (volmgrw monitor) を追加する .....	87
3-2 モニタ リソース (管理グループ用の NIC Link Up/Down monitor) を追加する .....	87
3-3 モニタ リソース (業務グループ用の NIC Link Up/Down monitor) を追加する .....	88
クラスタ構成情報を保存する .....	89
クラスタ構成情報をファイル システムへ保存する (Windows) .....	89
クラスタを生成する .....	90
クラスタを生成するには.....	90
<b>第 6 章       クラスタシステムを確認する.....</b>	<b>91</b>
WebManagerによる動作確認 .....	92
コマンドによるクラスタの動作確認.....	94

<b>第 7 章</b>	<b>クラスタ構成情報を変更する</b>	<b>97</b>
クラスタ構成情報を変更する		98
サーバを追加する		98
グループを追加する		99
グループリソースを追加する		99
モニタリソースを追加する		100
CLUSTERPRO Builder(オンライン版)を使用してクラスタ構成情報を変更する		101
CLUSTERPRO Builder(オフライン版)を使用してクラスタ構成情報を変更する		101
クラスタ構成情報を反映する		102
オンラインのBuilderを使用する場合		103
アップロードのみ		103
アップロードしてから WebManager を再起動		103
クラスタをサスペンドしてアップロード		103
クラスタを停止してからアップロード		103
アップロードしてからクラスタシャットダウン・再起動		104
オフラインのBuilderを使用する場合		105
アップロードのみ		105
アップロードしてから WebManager を再起動		105
クラスタをサスペンドしてアップロード		106
クラスタを停止してからアップロード		107
アップロードしてからクラスタシャットダウン・再起動		107
オフラインのBuilder を使用する場合の注意事項		109
クラスタ構成情報をアップロードするには		109
クラスタ構成情報をバックアップするには		109
<b>セクション III</b>	<b>運用開始前のクラスタシステムの評価</b>	<b>111</b>
<b>第 8 章</b>	<b>動作チェックを行う</b>	<b>113</b>
動作確認テストを行う		114
バックアップ手順を確認する		117
CLUSTERPRO 起動状態でのバックアップ		117
CLUSTERPRO 停止状態でのバックアップ		117
リストア手順を確認する		118
/opt/nec/clusterpro のディレクトリを含むファイル システムのリストア		118
共有ディスクのデータのリストアを実行する		119
<b>第 9 章</b>	<b>運用開始前の準備を行う</b>	<b>123</b>
基本的な運用、操作手順を理解する		124
クラスタを起動する		124
クラスタ シャットダウン、サーバ シャットダウンを実行する		125
クラスタ全体をシャットダウンするには		125
サーバ単体をシャットダウンするには		125
CLUSTERPRO を一時停止する		126
CLUSTERPRO デーモンの停止		126
CLUSTERPRO デーモンの無効化		126
無効化したCLUSTERPRO デーモンを有効にする		126
ログ収集手順を確認する		127
WebManager を使用してログを収集するには		127
<b>第 10 章</b>	<b>CLUSTERPRO をアンインストール/再インストールする</b>	<b>129</b>
アンインストール手順		130
CLUSTERPRO Server のアンインストール		130
オンライン版 CLUSTERPRO Builder のJavaのユーザポリシファイル設定の削除		131
オフライン版 CLUSTERPRO Builder のアンインストール		131

---

再インストール手順.....	132
CLUSTERPRO Serverの再インストール .....	132
<b>付録 A      トラブルシューティング.....</b>	<b>135</b>
CLUSTERPRO Serverのインストール時 .....	135
CLUSTERPRO Serverのアンインストール時 .....	135
ライセンス関連のトラブル シューティング .....	136
<b>付録 B      用語集.....</b>	<b>137</b>
<b>付録 C      索引 .....</b>	<b>141</b>



# はじめに

## 対象読者と目的

『CLUSTERPRO<sup>®</sup> X インストール&設定ガイド』は、CLUSTERPRO を使用したクラスタシステムの導入を行うシステムエンジニアと、クラスタシステム導入後の保守・運用を行うシステム管理者を対象読者とし、CLUSTERPRO を使用したクラスタシステム導入から運用開始前までに必須の事項について説明します。

実際にクラスタシステムを導入する際の順番に則して、CLUSTERPRO を使用したクラスタシステムの設計方法、CLUSTERPRO のインストールと設定手順、運用開始前に必要な評価手順について説明していきます。

## 本書の構成

### セクション I クラスタシステムの設計

CLUSTERPRO のインストール前に必要な作業を行います。構築するクラスタシステムのハードウェア構成と設定内容を決定し、CLUSTERPRO Builder で構成情報ファイルを作成します。

- 第 1 章 「システム構成を決定する」:動作環境の確認や設定について説明します。
- 第 2 章 「クラスタシステムを設計する」:クラスタシステムの設計方法について説明します。

### セクション II CLUSTERPRO のインストールと設定

CLUSTERPRO のインストールを実行します。サーバマシンへ CLUSTERPRO をインストールし、セクション I で作成した構成情報を用いてクラスタシステムを構築します。その後、システムが正常に稼動するかどうかの動作確認を行います。

- 第 3 章 「CLUSTERPROをインストールする」:CLUSTERPRO をインストールする手順について説明します。
- 第 4 章 「ライセンスを登録する」: ライセンスの登録方法について説明します。
- 第 5 章 「Builder でクラスタ構成情報を作成する」:Builder を使用して、クラスタ構成情報を作成する手順について説明します。
- 第 6 章 「クラスタシステムを確認する」:作成したクラスタシステムが正常に動作するかを確認します。
- 第 7 章 「クラスタ構成情報を変更する」:クラスタ構成を変更する手順について説明します。

### セクション III クラスタシステム運用開始前の準備

CLUSTERPRO の運用を開始する前に必須の評価作業を行います。構築したシステムの動作チェックを行った後、運用開始前に必要な事項について確認します。最後に、アンインストールおよび再インストールの手順について説明します。

- 第 8 章 「動作チェックを行う」:擬似障害テストや、パラメータ調整を行います。
- 第 9 章 「運用開始前の準備を行う」:本番運用を開始する際に注意事項について説明します。
- 第 10 章 「CLUSTERPRO をアンインストール/再インストールする」:アンインストール、再インストール情報について説明します。

### 付録

- 付録 A 「トラブルシューティング」:インストールや設定関連のトラブルとその解決策について説明します。
- 付録 B 「用語集」:CLUSTERPRO で紹介された用語の解説をします。
- 付録 C 「索引」

---

## CLUSTERPRO マニュアル体系

CLUSTERPRO のマニュアルは、以下の 4 つに分類されます。各ガイドのタイトルと役割を以下に示します。

### 『CLUSTERPRO X スタートアップガイド』(Getting Started Guide)

すべてのユーザを対象読者とし、製品概要、動作環境、アップデート情報、既知の問題などについて記載します。

### 『CLUSTERPRO X インストール & 設定ガイド』(Install and Configuration Guide)

CLUSTERPRO を使用したクラスタ システムの導入を行うシステム エンジニアと、クラスタ システム導入後の保守・運用を行うシステム管理者を対象読者とし、CLUSTERPRO を使用したクラスタ システム導入から運用開始前までに必須の事項について説明します。実際にクラスタ システムを導入する際の順番に則して、CLUSTERPRO を使用したクラスタ システムの設計方法、CLUSTERPRO のインストールと設定手順、設定後の確認、運用開始前の評価方法について説明します。

### 『CLUSTERPRO X リファレンス ガイド』(Reference Guide)

管理者を対象とし、CLUSTERPRO の運用手順、各モジュールの機能説明、メンテナンス関連情報およびトラブルシューティング情報等を記載します。『インストール & 設定ガイド』を補完する役割を持ちます。

### 『CLUSTERPRO X 統合WebManager 管理者ガイド』(Integrated WebManager Administrator's Guide)

CLUSTERPRO を使用したクラスタシステムを CLUSTERPRO 統合WebManager で管理するシステム管理者、および統合WebManager の導入を行うシステム エンジニアを対象読者とし、統合WebManager を使用したクラスタ システム導入時に必須の事項について、実際の手順に則して詳細を説明します。

## 本書の表記規則

本書では、注意すべき事項、重要な事項および関連情報を以下のように表記します。

**注：**は、重要ではあるがデータ損失やシステムおよび機器の損傷には関連しない情報を表します。

**重要：**は、データ損失やシステムおよび機器の損傷を回避するために必要な情報を表します。

**関連情報：**は、参照先の情報の場所を表します。

また、本書では以下の表記法を使用します。

表記	使用方法	例
[ ] 角かっこ	コマンド名の前後 画面に表示される語 (ダイアログ ボックス、メニューなど) の前後	[スタート] をクリックします。 [プロパティ] ダイアログ ボックス
コマンドライン中の [ ] 角かっこ	かっこ内の値の指定が省略可能であることを示します。	clpstat -s[-h host_name]
#	Solaris ユーザが、root でログインしていることを示すプロンプト	# clpcl -s -a
モノスペース フォント (courier)	パス名、コマンド ライン、システムからの出力 (メッセージ、プロンプトなど)、ディレクトリ、ファイル名、関数、パラメータ	/Solaris/2.1/jpn/server/
モノスペース フォント太字 (courier)	ユーザが実際にコマンドラインから入力する値を示します。	以下を入力します。 # clpcl -s -a
モノスペース フォント (courier) 斜体	ユーザが有効な値に置き換えて入力する項目	pkgadd -d NECclusterpro-<バージョン番号>-<リリース番号>.x86.pkg

---

## 最新情報の入手先

最新の製品情報については、以下のWebサイトを参照してください。

<http://www.nec.co.jp/clusterpro/>

# セクション I クラスタシステムの設計

CLUSTERPRO をインストールする前に、クラスタシステムをどのようなハードウェア構成、運用形態で構築するのかを十分に検討する必要があります。

このセクションでは、CLUSTERPRO のインストール前に必要なクラスタシステムのハードウェア構成の決定と、CLUSTERPRO X Builder を使用したクラスタ設定情報の作成について説明します。

- 第 1 章 システム構成を決定する
- 第 2 章 クラスタシステムを設計する



# 第 1 章                    システム構成を決定する

本章では、CLUSTERPRO を用いたクラスタシステムのシステム構成を決定する方法について説明します。  
本章で説明する項目は以下の通りです。

• クラスタシステム設計から運用開始前テストまでの流れ .....	16
• CLUSTERPRO とは?.....	18
• システム構成の検討 .....	20
• CLUSTERPRO モジュール別の動作環境を確認する.....	23
• CLUSTERPRO (本体モジュール) のハードウェア構成例 .....	25
• Builder の動作環境を確認する .....	26
• WebManager の動作環境を確認する .....	27
• ハードウェア構成の決定 .....	28
• ハードウェア構成後の設定 .....	29

# クラスタシステム設計から運用開始前テストまでの流れ

CLUSTERPRO を使用したクラスタシステムを構築する前に、必要なハードウェア環境、使用するソフトウェア、運用形態などを十分に考慮してシステムを設計する必要があります。

また、クラスタ構築後、運用開始前には、適切にクラスタシステムが構築されているかどうかをテストする必要があります。

本書は、この一連の流れに則して説明します。実際にクラスタシステムを導入する手順を実行しながら、読み進めてください。以下に CLUSTERPRO を使用したクラスタシステムの設計から運用開始前までの流れを記載します。

## セクション I クラスタシステムの設計

CLUSTERPRO のインストール前に必要な作業を行います。構築するクラスタシステムのハードウェア構成と設定内容を決定します。

ステップ 1. 「システム構成を決定する」(第 1 章)

ステップ 2. 「クラスタシステムを設計する」(第 2 章)

## セクション II CLUSTERPRO のインストールと設定

CLUSTERPRO のインストールを実行します。サーバマシンへ CLUSTERPRO をインストールし、セクション I で作成した構成情報を用いて CLUSTERPRO Builder で構成情報ファイルを作成し、クラスタシステムを構築します。その後、システムが正常に稼動するかどうかの動作確認を行います。

ステップ 3. 「CLUSTERPROをインストールする」(第 3 章)

ステップ 4. 「ライセンスを登録する」(第 4 章)

ステップ 5. 「Builder でクラスタ構成情報を作成する」(第 5 章)

ステップ 6. 「クラスタシステムを確認する」(第 6 章)

ステップ 7. 「クラスタ構成情報を変更する」(第 7 章)

## セクション III クラスタシステム運用開始前の準備

CLUSTERPRO の運用を開始する前に必須の評価作業を行います。構築したシステムの動作チェックを行った後、運用開始前に必要な事項について確認します。最後に、アンインストールおよび再インストールの手順について説明します。

ステップ 8. 「動作チェックを行う」(第 8 章)

ステップ 9. 「運用開始前の準備を行う」(第 9 章)

ステップ 10. 「CLUSTERPRO をアンインストール/再インストールする」(第 10 章)



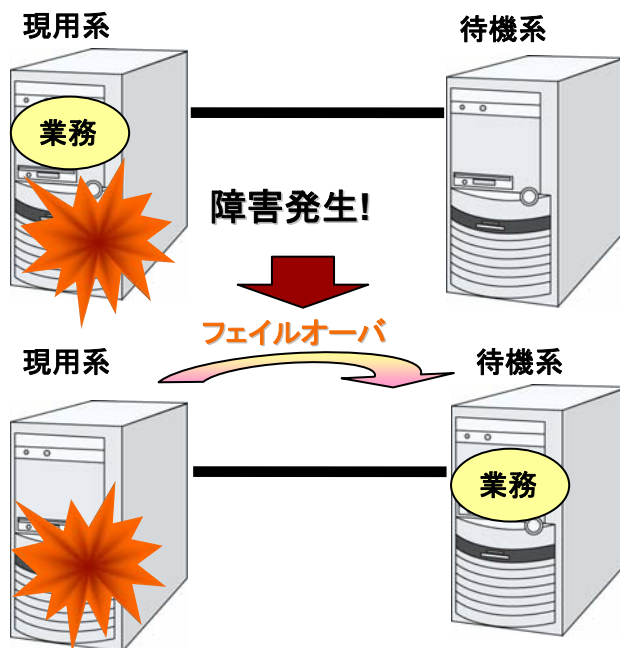
---

**関連情報:** 本書の流れに従って操作を行うためには、本ガイドの手順に従いながら、随時『CLUSTERPRO X リファレンスガイド』を参照する必要があります。また、動作環境やリリース情報などの最新情報は、『CLUSTERPRO X スタートアップガイド』を確認してください。

---

## CLUSTERPRO とは？

CLUSTERPRO とは、冗長化（クラスタ化）したシステム構成により、現用系のサーバでの障害が発生した場合に、自動的に待機系のサーバで業務を引き継がせることで、飛躍的にシステムの可用性と拡張性を高めることを可能にするソフトウェアです。



CLUSTERPRO を使用したクラスタシステムの導入により、次の効果を得られます。

◆ 高可用性

クラスタを構成するサーバのうち一台が障害などにより停止しても、そのサーバが処理していた業務を他の健全なサーバへ自動的に引き継ぐことにより、障害時の業務停止時間を最小限に抑えます。

◆ 高拡張性

最大 32 台までのパラレルデータベースをサポートすることにより、拡張性の高い高性能なデータベースプラットフォームを提供します。

---

**関連情報：** CLUSTERPRO の詳細については、『スタートアップガイド』のセクション 1 「CLUSTERPRO の概要」を参照してください。

---

## CLUSTERPRO のソフトウェア構成

CLUSTERPRO は、以下の 3 つのソフトウェアで構成されています。

◆ CLUSTERPRO Server

CLUSTERPRO のメインモジュールです。クラスタを構成する各サーバにインストールします。

◆ WebManager

CLUSTERPRO の運用管理を行うための管理ツールです。

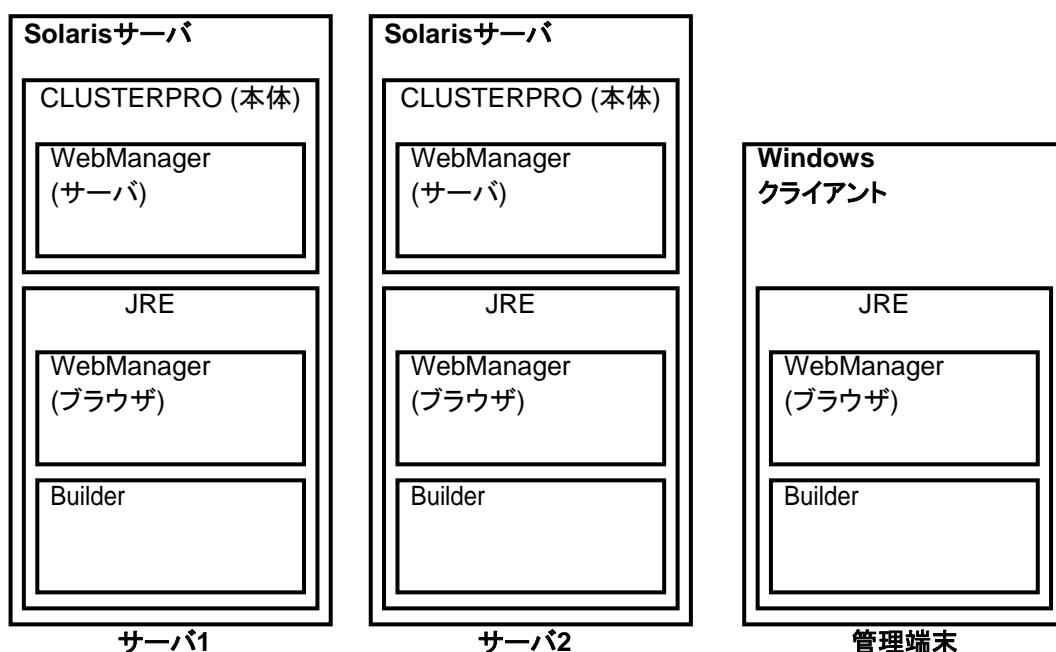
ユーザインターフェースとして Web ブラウザを利用します。実体は CLUSTERPRO Server に組み込まれていますが、操作は管理端末上の Web ブラウザで行うため、CLUSTERPRO 本体とは区別されています。

◆ Builder

CLUSTERPRO の構成情報を作成するためのツールです。

WebManager と同じく、ユーザインターフェースとして Web ブラウザを利用します。

オンライン版とオフライン版があります。オフライン版は利用する端末にインストールする必要があります。



Builder と WebManager は JAVA VM 上で動作する JAVA アプレットであり、JRE がインストールされている Windows 上で動作させることが可能です。

## システム構成の検討

構築するクラスタの用途や運用形態を良く確認してから、ハードウェア構成を決定します。以下に CLUSTERPRO の構成例を記載します。

---

**関連情報:** 動作環境やリリース情報などの最新情報は『スタートアップガイド』で確認してください。

---

### 共有ディスク方式

システム構成は、共有ディスク方式があります。

#### ◆ 共有ディスク方式

共有ディスク方式は、双方のサーバから、物理的に接続された共有ディスクにデータを格納することで、フェイルオーバー後も同一データにアクセスできるようにする方式です。

一方のサーバが共有ディスクの特定領域を利用している場合、もう一方からはアクセスできないようなガードを設けることが一般的です。

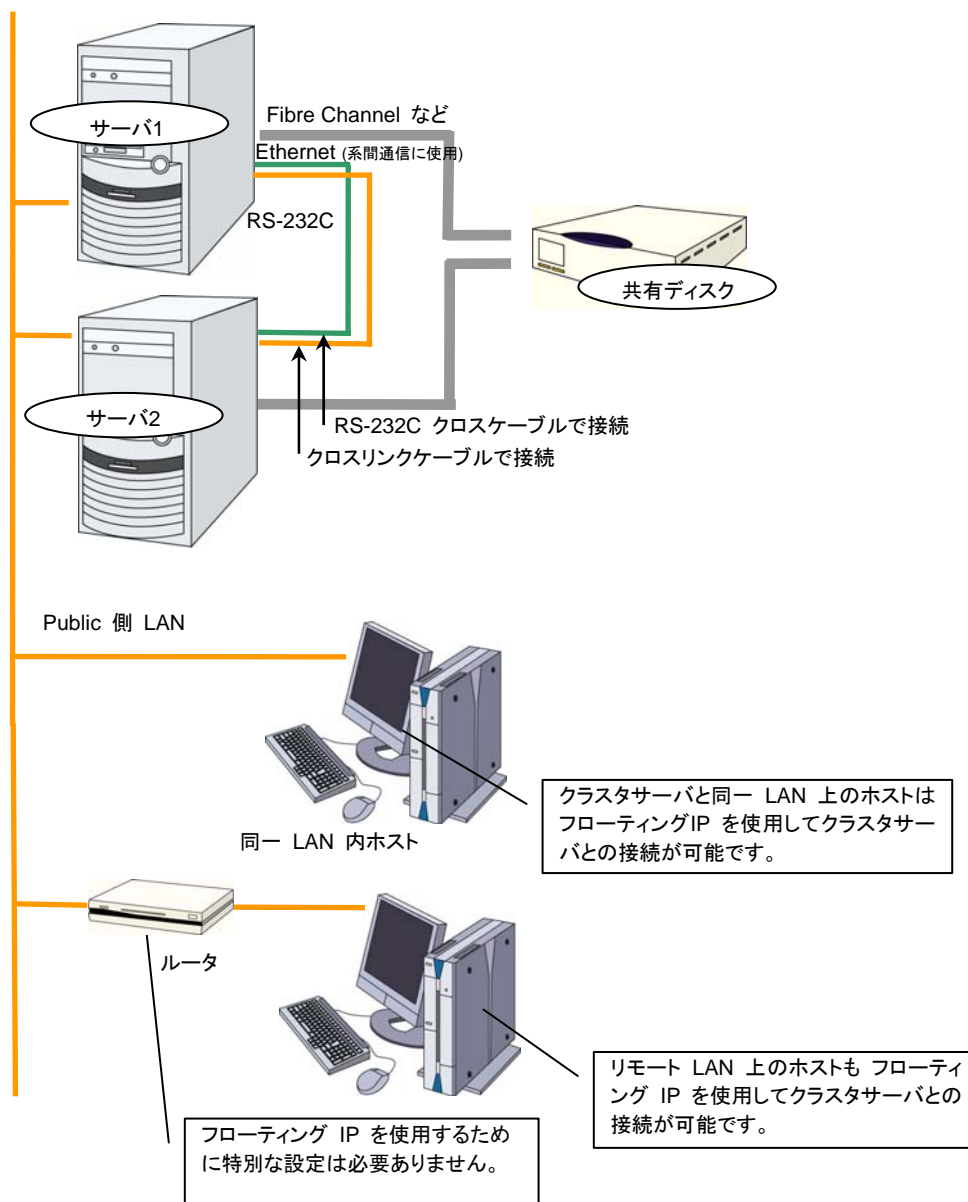
データ書き込みにおける性能劣化が無いため、データベースサーバ等、データ書き込み量が多いシステムで利用されています。

以降のページに、共有ディスクを用いた構成の例を示します。これらの例を参考にしながら、システム構成を行ってください。

## 2 ノードで共有ディスクを使用する場合の構成例

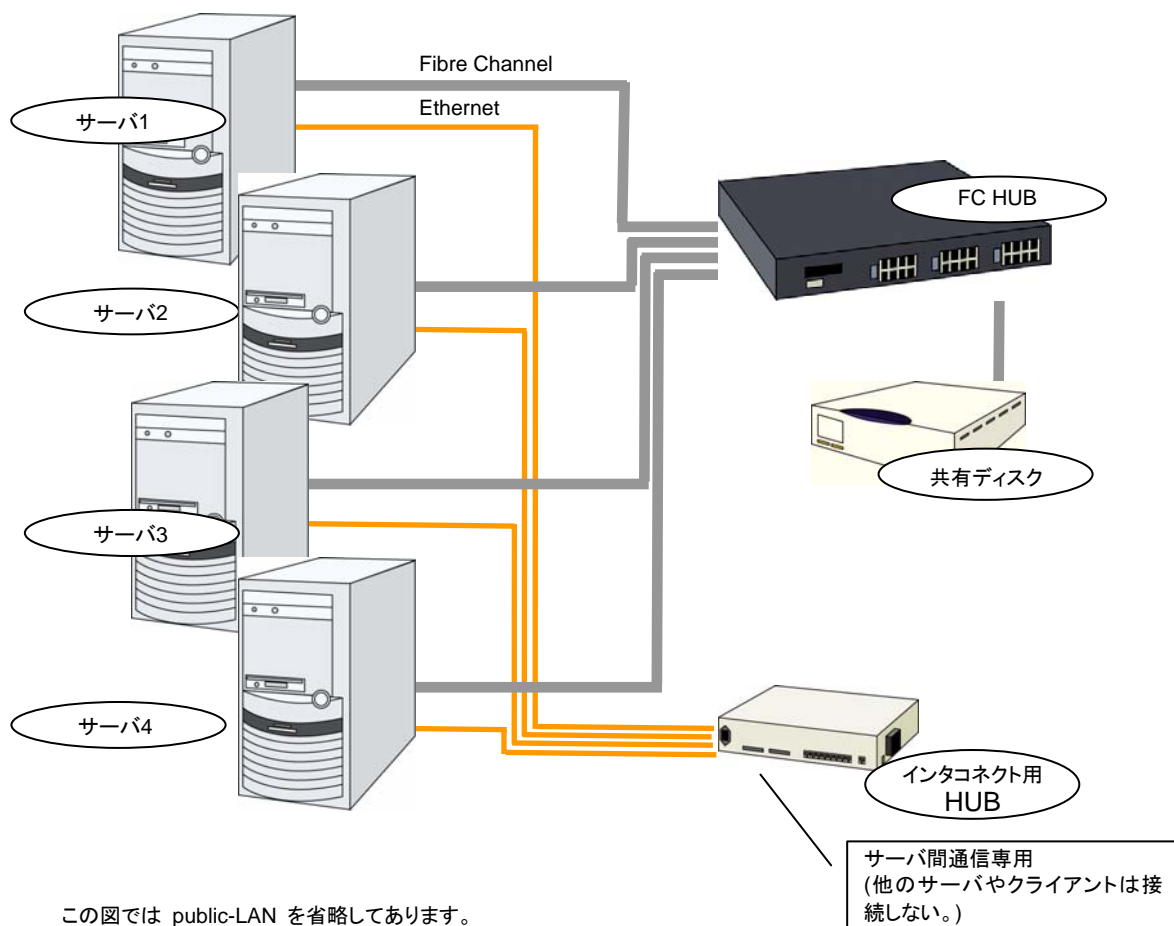
最も一般的なシステム構成です。

- ◆ サーバは異機種でも構いません
- ◆ インタコネクトをクロスケーブルで接続します (4 ノードの場合と同様に専用 HUB を設置して接続しても構いません)。
- ◆ COM (RS-232C) ポートをクロスケーブルで接続します。



## 4 ノードの構成例

- ◆ 2 ノードの場合と同様に共有ディスクを接続します。
- ◆ インタコネクトを専用 HUB 経由で接続します。
- ◆ RS-232C でサーバ間を接続する必要はありません。



# CLUSTERPRO モジュール別の動作環境を確認する

CLUSTERPRO の基本モジュールは、CLUSTERPRO Server (本体)、CLUSTERPRO WebManager、CLUSTERPRO Builder の 3 つで構成されています。各モジュールをインストールするマシンごとに、動作環境を確認してください。以下に、基本的な動作環境 (CLUSTERPRO X 2.1 for Solaris の場合) を示します。

- ◆ CLUSTERPRO Server をサポートするオペレーティングシステムの詳細
- ◆ OS のルート ファイル システムには、ジャーナリング可能なファイル システムの使用を推奨します。ジャーナリングシステムに対応していないファイルシステムを使用した場合、サーバや OS の停止(正常なシャットダウンが行えなかった場合)から再起動した場合、インタラクティブなコマンドの実行(rootファイルシステムの fsck の実行)が必要になります。

以下にモジュール別の動作環境一覧を示します。

CLUSTERPRO Server	
対象機種	下記のOSが動作可能なサーバ
対応OS	i86pc(x86/x86_64)版 Solaris 10

Builder	
対象機種	下記のOSが動作可能なPC
動作確認済みOS	Microsoft Windows® XP SP2 Microsoft Windows Vista™ Microsoft Windows Server 2003 SP1 以降 Microsoft Windows Server 2008 * Microsoft Windows Vista™ はMicrosoft Internet Explorer 7.0 のブラウザのみ動作確認済みです。
動作確認済みブラウザ	【Java 2 対応ブラウザ】 Firefox 1.0.6以降 Microsoft Internet Explorer 6.0 SP1以降 Microsoft Internet Explorer 7.0
Java実行環境	Sun Microsystems Java(TM) Runtime Environment Version 5.0 Update 6 (1.5.0_06)以降 * Builder を使用するには、Java実行環境が必要です。 * Microsoft Windows Vista™ ではVersion 6.0 (1.6.0) 以降が必要 です。

WebManager	
対象機種	下記のOSが動作可能なPC
動作確認済みOS	Microsoft Windows® XP Microsoft Windows Vista™ Microsoft Windows Server 2003 SP1 以降 Microsoft Windows Server 2008 * Microsoft Windows Vista™ はMicrosoft Internet Explorer 7.0 のブラウザのみ動作確認済みです。
動作確認済みブラウザ	【Java 2 対応ブラウザ】 Firefox 1.0.6以降 Microsoft Internet Explorer 6.0 SP1以降 Microsoft Internet Explorer 7.0
Java実行環境	Sun Microsystems Java(TM) Runtime Environment Version 5.0 Update 6 (1.5.0_06) 以降 * WebManager を使用するには、Java実行環境が必要です。 * Microsoft Windows Vista™ ではVersion 6.0 (1.6.0) 以降が必要 です。

関連情報: サポートされているハードウェアや OS の一覧など最新の動作環境情報については、『スタートアップガイド』を参照してください。



# CLUSTERPRO (本体モジュール) のハードウェア構成例

CLUSTERPRO の本体モジュールは、クラスタを構築する各サーバにインストールします。  
CLUSTERPRO WebManager は、CLUSTERPRO 本体モジュールの一部です。  
CLUSTERPRO Server をインストールすると自動的にインストールされます。

## CLUSTERPRO Server で推奨するスペック

CLUSTERPRO Server で推奨するスペックは下記の通りです。

- ◆ RS-232C ポート 1 つ (3 ノード以上のクラスタを構築する場合は不要)
- ◆ Ethernet ポート 2 つ以上
- ◆ 共有ディスク (ディスクリソース用)
- ◆ USB ポート (オフライン Builder を使用する場合)
- ◆ CD-ROM ドライブ

---

### 関連情報:

サポートされているハードウェアや OS の一覧など最新の動作環境情報については、『スタートアップガイド』を参照してください。

---

## Builder の動作環境を確認する

Builder の動作確認済 OS、動作確認済ブラウザ、Java 実行環境、必要メモリ容量/ディスク容量などの最新の動作環境情報については、『スタートアップガイド』を参照してください。

## WebManager の動作環境を確認する

WebManager は、CLUSTERPRO を使用したクラスタシステムの状態を監視するために、管理用の PC から通常の Web ブラウザを経由してアクセスします。このため、管理用 PC は、ネットワーク経由でクラスタにアクセス可能である必要があります。この管理 PC のオペレーティングシステムは、Windows が使用できます。

WebManager の動作確認済 OS、動作確認済ブラウザ、Java 実行環境、必要メモリ容量/ディスク容量などの最新の動作環境情報については、『スタートアップガイド』を参照してください。

## ハードウェア構成の決定

ハードウェア構成の決定は、クラスタシステム上で二重化するアプリケーションとクラスタシステムの設計を考慮して行う必要があります。次章の「クラスタシステムを設計する」を確認した後に行ってください。

# ハードウェア構成後の設定

ハードウェア構成を決定し、実際にハードウェアの設置を行った後に、以下を確認してください。

1. ディスクリソース用の共有ディスクの設定 (ディスクリソース使用時は必須)
2. OS 起動時間の調整 (必須)
3. ネットワークの確認 (必須)
4. ルート ファイル システムの確認 (必須)
5. ファイアウォールの確認 (必須)
6. サーバの時刻同期 (推奨)

## 1. ボリュームマネージャリソース及びディスクリソース用の共有ディスクを設定する (ボリュームマネージャリソースまたはディスクリソース使用時は必須)

以下の手順で共有ディスクの設定を行います。

**注:** 共有ディスク上のデータを引き続き使用する場合 (サーバの再インストール時など) は、パーティションの確保やファイル システムの作成は行わないでください。パーティションの確保やファイル システムの作成を行うと共有ディスク上のデータは削除されます。

### 1. ディスク ハートビート用パーティションの確保

共有ディスク上に CLUSTERPRO が独自に使用するパーティションを作成します。このパーティションはディスクハートビートリソースが使用します。

パーティションは、共有ディスクを使用するクラスタ内の 1 台のサーバから作成します。パーティションの作成には format コマンドを使います。

**注:**

- 通常、ハートビートリソースに使用するパーティションは 1 つです。しかし、ディスクの故障などでデバイス名がずれた場合には、他の LUN でハートビートを行う必要があります。このため、通常ハートビートに使用する LUNに加えて、各 LUNに 1 つ、予備としてダミーのディスク ハートビートリソース用のパーティションを確保しておきます。この際、ディスク ハートビート専用パーティションのパーティション番号は各 LUN で同じになるように確保してください。
- 複数の LUN を使用している場合でも、ディスク ハートビート リソースはクラスタ内で 1 つ、最大 2 つまでの使用を推奨します。ディスク ハートビート リソースはハートビート インターバルごとにディスクへの read/write を行うためディスクへの負荷を考えて設定してください。
- ディスク ハートビート用パーティションは 10MB (10\*1024\*1024 バイト) 以上確保してください。また、ディスク ハートビート用パーティションにはファイル システムの構築は必要ありません。

### 2. ボリュームマネージャ リソース/ディスク リソース用パーティションの確保

共有ディスク上にボリュームマネージャ リソース/ディスク リソースで使用するパーティションを作成します。共有ディスクを使用するクラスタ内の 1 台のサーバから作成します。パーティションの作成には `format` コマンドを使います。

### 3. ファイル システムの作成

共有ディスク上のボリュームマネージャ リソース/ディスク リソース用パーティションにファイル システムを構築します。共有ディスクを使用するクラスタ内の 1 台のサーバから、通常の Solaris と同様にファイル システムを構築してください。作成するファイル システムによって構築手順が変わります。

#### [ZFS で作成する場合]

##### 1. ZFS ストレージプールの作成

ZFS ストレージプールで使用するディスクには、ディスク全体または、ディスクパーティションを指定します。ZFS ストレージプールは共有ディスクを使用するクラスタ内の 1 台のサーバから作成します。

(実行例) デバイス名 `c1t0d0` , ZFS ストレージプール名 `tank`

```
zpool create tank c1t0d0
```

##### 2. ZFS ファイルシステムの作成

必要であれば、ZFS ストレージプールに ZFS ファイルシステムを追加で作成します。ZFS ファイルシステムは共有ディスクを使用するクラスタ内の 1 台のサーバから作成します。

(実行例) ファイルシステム名 `data` , マウントポイント `/tank/data`

```
zfs create tank/data
```

##### 3. ZFS ストレージプールのエクスポート

ZFS ファイルシステムの作成、および設定が完了したら、ZFS ストレージプールを必ずエクスポートしてください。ZFS ストレージプールのインポート、エクスポートの制御を CLUSTERPRO が行うため、CLUSTERPRO が起動する前に ZFS ストレージプールがエクスポートされている必要があります。

(実行例) ZFS ストレージプール名 `tank`

```
zpool export tank
```

#### [UFS で作成する場合]

##### 1. UFS の作成

UFS で使用するディスクにはディスクパーティションを指定します。

(実行例) デバイス名 `c1t0d0`

```
newfs /dev/rdisk/c1t0d0
```

---

#### 注:

- ディスク ハートビート用パーティションにはファイル システムの構築は必要ありません。
  - 共有ディスク上のファイル システムは CLUSTERPRO が制御します。共有ディスクのファイル システムを OS の `/etc/vfstab` にエントリしないでください。
- 

- 共有ディスクで使用するファイルシステムについて基本的に依存をしていますが、ファイルシステムの `fsck` の仕様により問題が発生することがあります。
- システムの対障害性の向上のために、ジャーナル機能を持つファイルシステムを使用することを推奨します。
- 現在 IA32、x86\_64 で動作確認を完了しているファイルシステムは下記の通りです。

CLUSTERPRO X 2.1 for Solaris インストール & 設定ガイド

- ufs
- zfs

#### 4. マウント ポイントの作成

ディスク リソース用パーティションを mount するディレクトリを作成します。  
ディスク リソースを使用する、クラスタ内のすべてのサーバで作成します。

## 2. OS 起動時間を調整する (必須)

クラスタ システムを構成する各サーバに電源を投入してから、サーバの OS が起動するまでの時間を、以下の 2 つより長くなるように設定する必要があります。

- ◆ 共有ディスクに電源を投入してから使用可能になるまでの時間(共有ディスクを使用する場合)
- ◆ ハートビート タイムアウト時間  
Builder での既定値は 90 秒 です

これは、以下の問題を回避するためです。

- ◆ 共有ディスクとサーバの電源を入れてクラスタシステムを起動すると、ディスクリソースの活性に失敗する
- ◆ サーバの再起動でフェイルオーバが発生させたい場合に、ハートビート タイムアウト時間内にそのサーバが再起動してしまうと、相手側からはハートビートが継続しているとみなされフェイルオーバが発生しない

上記 2 点の時間を計測後、以下の手順例に従って OS 起動時間を調整します。

#### OS ロードに GRUB を使用している場合

- ◆ /boot/grub/menu.lst を編集します。

timeout <起動時間 (単位は秒)> オプションを指定します。下記の例の場合にはアンダーラインの部分のみ変更してください。

```
---(例 起動時間90秒)---
default 0
timeout 30
timeout 90

title Solaris 10
  findroot (rootfs0,0,a)
  kernel /platform/i86pc/multiboot
  module /platform/i86pc/boot_archivekernel
```

---

注: GRUB 以外の OS ロードを使用している場合は、各 OS ロードの設定マニュアルを参照してください。

---

### 3. ネットワーク設定を確認する (必須)

クラスタ内のすべてのサーバで、ifconfig コマンドや ping コマンドを使用して、ネットワークが正常に動作しているかどうかを確認します。また、複数のネットワークデバイス (e1000g0、e1000g1...) が、意図した役割 (パブリック LAN、インタコネクト専用 LAN) に割り当てられているかどうかを確認します。以下のネットワークの状態を確認します。

- ◆ パブリック LAN (他のマシンとの通信用)
- ◆ インタコネクト専用 LAN (CLUSTERPRO のサーバ間接続用)
- ◆ ホスト名

---

注: クラスタで使用する フローティング IP リソース および 仮想 IP リソース の IP アドレスは、OS 側への設定は不要です。

---

### 4. ルート ファイル システムを確認する (必須)

OS のルート ファイル システムには、ジャーナリング可能なファイル システムの使用を推奨します。

---

**重要:** ジャーナリングシステムに対応していないファイルシステムを使用した場合、サーバや OS の停止(正常なシャットダウンが行えなかった場合)から再起動した場合、インタラクティブなコマンドの実行(root ファイルシステムの fsck の実行)が必要になります。これはクラスタシステムに限ったことではなく、単体のサーバでも同様です。

---



## 5. ファイアウォールの設定を確認する (必須)

CLUSTERPRO はいくつかのポート番号を使用します。ファイアウォールの設定を変更して CLUSTERPRO がポート番号を使用できるように設定してください。

以下に CLUSTERPRO が使用するポート番号の一覧を示します。

### [サーバ・サーバ間][サーバ内ループバック]

					備考
サーバ	自動割り当て <sup>1</sup>	—	サーバ	29001/TCP	内部通信
サーバ	自動割り当て	—	サーバ	29002/TCP	データ転送
サーバ	自動割り当て	—	サーバ	29002/UDP	ハートビート
サーバ	自動割り当て	—	サーバ	29003/UDP	アラート同期
サーバ	自動割り当て	—	サーバ	icmp	FIP/VIP リソースの重複確認、
サーバ	自動割り当て	—	サーバ	XXXX <sup>5</sup> /UDP	内部ログ用通信

### [サーバ・WebManager 間]

					備考
Web Manager	自動割り当て	—	サーバ	29003/TCP	http 通信

### [統合 WebManager を接続しているサーバ・管理対象のサーバ間]

					備考
統合 WebManager を接続したサーバ	自動割り当て	—	サーバ	29003/TCP	http 通信

### [その他]

					備考
サーバ	自動割り当て	—	ネットワーク警告灯	514/TCP	ネットワーク警告灯制御
サーバ	自動割り当て	—	サーバの BMC の管理 LAN	623/UDP	BMC 制御 (強制停止/筐体ランプ連携)
サーバ	自動割り当て	—	監視先	icmp	IP モニタ
サーバ	自動割り当て	—	NFS サーバ	icmp	NAS リソースの NFS サーバ死活確認
サーバ	自動割り当て	—	監視先	icmp	Ping 方式ネットワークパーティション解決リソースの監視先

1. 自動割り当てでは、その時点で使用されていないポート番号が割り当てられます。
2. クラスタプロパティ、ポート番号(ログ)タブでログの通信方法に[UDP]を選択し、ポート番号で設定したポート番号を使用します。デフォルトのログの通信方法 [UNIX ドメイン]では通信ポートは使用しません。

## 6. サーバの時刻を同期させる (必須)

クラスタ システムでは、クラスタ内のすべてのサーバの時刻を定期的に同期する運用を推奨します。1 日 1 回程度を目安に ntp などを使用してサーバの時刻を同期させる設定にしてください。

---

**注:** 各サーバの時刻が同期されていない場合、障害時に原因の解析に時間がかかることがあります。

---

## 第 2 章 クラスタシステムを設計する

本章では、二重化するアプリケーション、運用形態、クラスタ構築情報の説明など、クラスタ設計に際して必要な情報を提供します。

本章で説明する項目は以下の通りです。

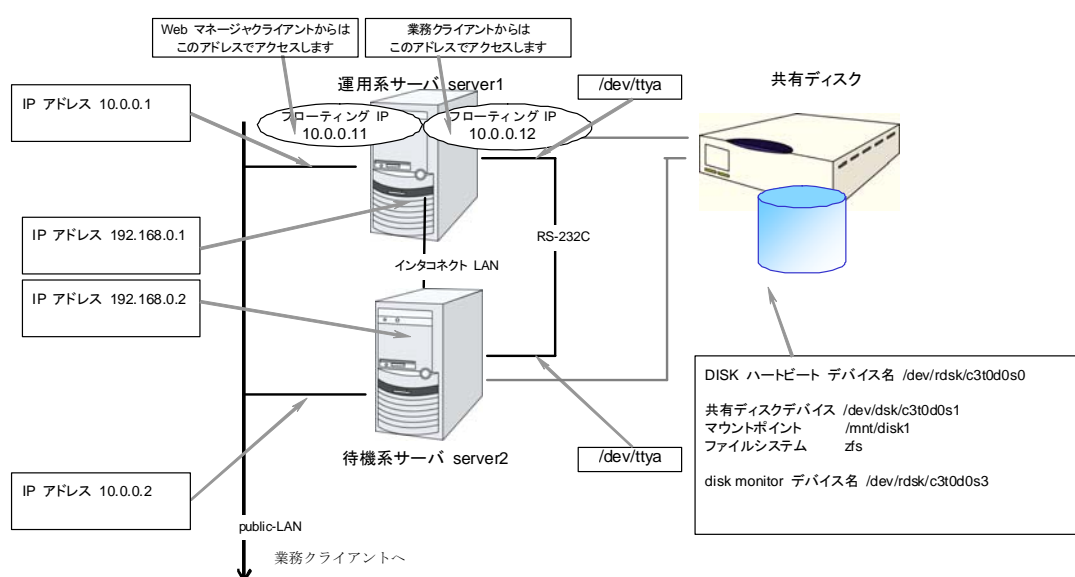
• クラスタシステムの設計 .....	36
• 運用形態を決定する .....	37
• 二重化するアプリケーションを決定する .....	40
• クラスタ構成を設計する .....	43
• グループリソースを理解する .....	44
• モニタリソースを理解する .....	45
• ハートビートリソースを理解する .....	47
• ネットワークパーティション解決リソースを理解する .....	48

## クラスタシステムの設計

本章では、クラスタシステムの設計について、以下を行います。

1. クラスタシステムの運用形態の決定
2. 二重化するアプリケーションの決定
3. クラスタ構成情報の作成

なお、本ガイドでは、以下の図に記載されている、典型的な 2 ノード、片方向スタンバイのクラスタ環境を構築する場合を例にとって説明を行います。

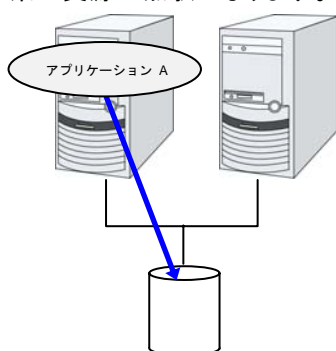


## 運用形態を決定する

CLUSTERPRO は、複数の運用形態をサポートしています。片方のサーバを現用系、他方を待機系とする片方向スタンバイ形式と、両方のサーバがお互いに異なる業務の現用系、待機系となる双方向スタンバイ形式があります。

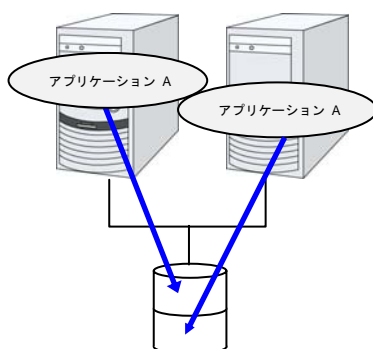
### ◆ 片方向スタンバイクラスタ

クラスタシステム全体で同一の業務アプリケーションが 1 つしか動作しないシステム形態です。フェイルオーバー発生後もパフォーマンスの劣化等はありませんが、正常時、待機系の資源が無駄になります。



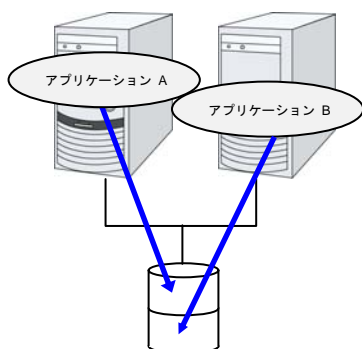
### ◆ 同一アプリケーション双方向スタンバイクラスタ

クラスタシステム全体で同一の業務アプリケーションが複数動作するシステム形態です。この構成を構築するには業務が多重起動に対応している必要があります。



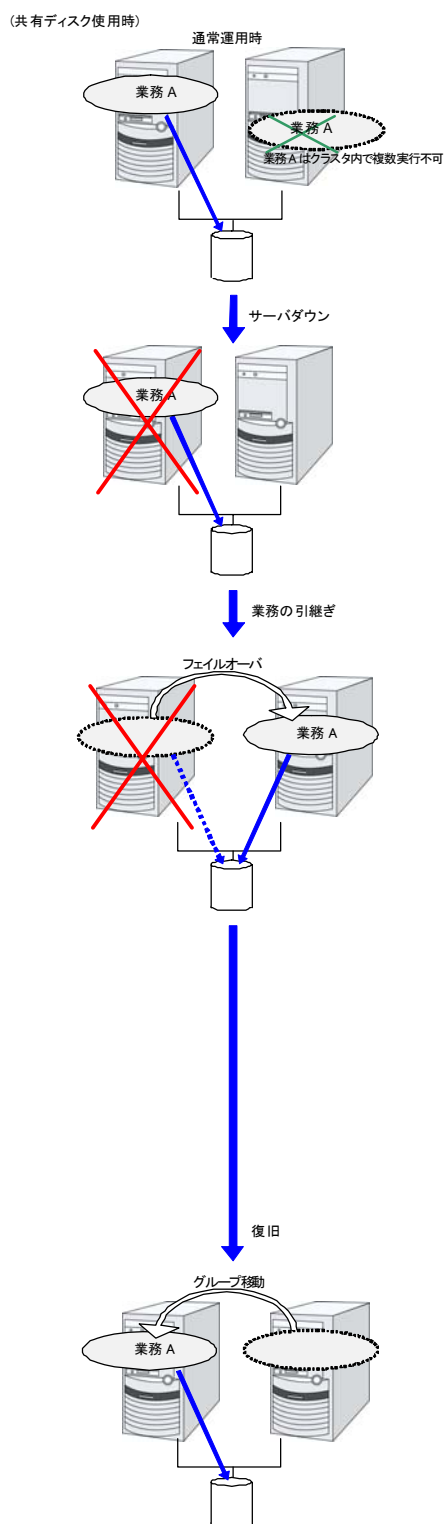
### ◆ 異種アプリケーション双方向スタンバイクラスタ

複数の種類の業務アプリケーションが、それぞれ異なるサーバで稼動し、相互に待機するシステム形態です。正常時も資源が無駄になりません。ただし、フェイルオーバー発生後は、1 台のサーバで 2 種の業務が動作するため、業務のパフォーマンスが低下します。



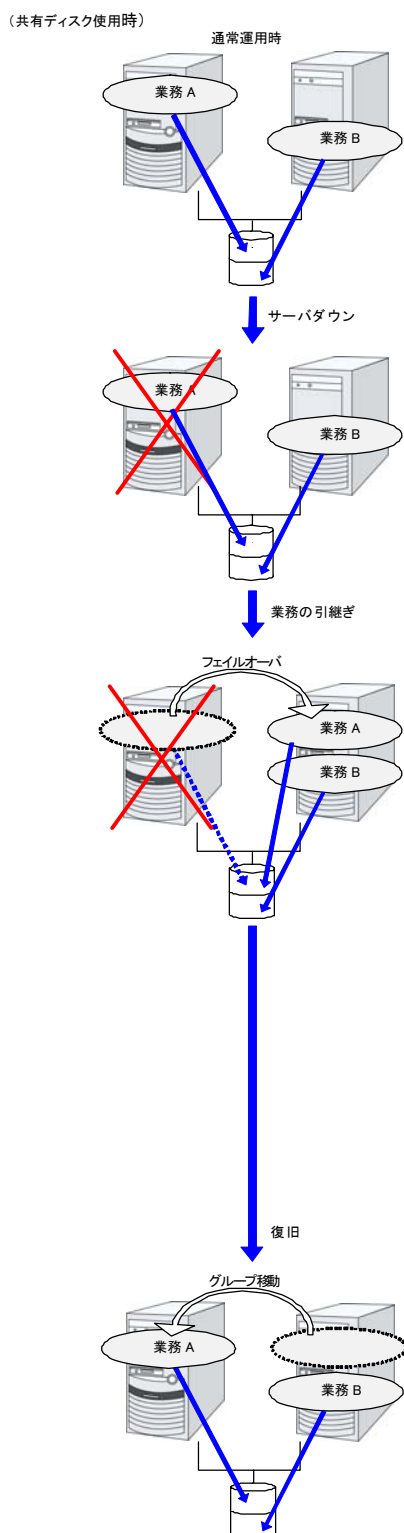
## 片方向スタンバイクラスタのフェイルオーバーの流れ

片方向スタンバイクラスタでは、ある業務が動作するグループがクラスタ内で常に 1 台のサーバ上で動作するように制限されています。



## 双方向スタンバイクラスタフェイルオーバーの流れ

双方向スタンバイクラスタでは、ある業務が複数のサーバ上で同時に動作することが可能なため、フェイルオーバー実行時、現用系に負荷がかかります。



## 二重化するアプリケーションを決定する

二重化するアプリケーションを決定するには、アプリケーションが CLUSTERPRO によるクラスタシステム上でのクラスタ対象として適しているかどうかを、以下の内容を十分に検討して判断します。

### 注意事項に該当する構成

対象アプリケーションをどのようなスタンバイ形態にするかで注意事項が異なります。注意事項については「注意事項」(1 ~ 5) に対応します。

- ◆ 片方向スタンバイ [現用-待機] 注意事項: 1 2 3 4 5
- ◆ 双方向スタンバイ [現用-現用] 注意事項: 1 2 3 4 5
- ◆ 共存動作 注意事項: 4 2 3 4 5  
クラスタシステムによるフェイルオーバーの対象とはせず、共存動作する運用形態です。

### 対象アプリケーションについての注意事項

#### 注意事項 1: 障害発生後のデータ修復

障害発生時に現用系のアプリケーションが更新していたファイルは、フェイルオーバー後に待機系でアプリケーションがそのファイルにアクセスするとき、データとして完結していない状態にある場合があります。

非クラスタ (単体サーバ) での障害後のリブートでも同様のことが発生するため、本来アプリケーションはこのような障害に対処するメカニズムを持っている必要があります。クラスタシステム上ではこれに加え人間の関与なしに (スクリプトから) 復旧が行える必要があります。

共有ディスクのファイルシステムに fsck が必要な場合には、CLUSTERPRO が fsck を行います。

#### 注意事項 2: アプリケーションの終了

CLUSTERPRO が業務グループを停止・移動 (オンラインフェイルバック) する場合、その業務グループが使用していたファイルシステムをアンマウントします。このため、アプリケーションへの終了指示にて、共有ディスク上の全てのファイルに対するアクセスを停止する必要があります。

通常は終了スクリプトでアプリケーション終了指示コマンドを実行しますが、終了指示コマンドが (アプリケーションの終了と) 非同期で完了してしまう場合注意が必要です。



### 注意事項 3: データ格納位置

CLUSTERPRO がサーバ間で引き継ぐことのできるデータは次の通りです。

◆ 共有ディスク

アプリケーションのデータを、サーバ間で共有すべきデータと、サーバ固有のデータを異なる配置場所に分けて保存する必要があります。

データの種類	例	配置場所
引き継ぎたいデータ	ユーザデータなど	共有ディスク
引き継ぎたくないデータ	プログラム、設定情報など	サーバのローカルディスク

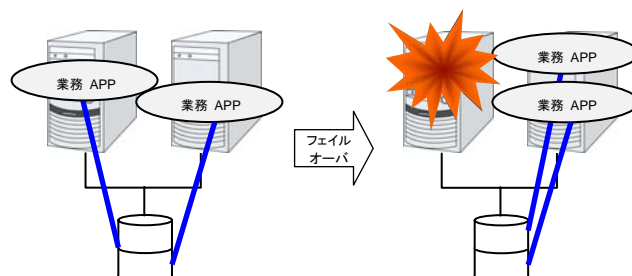
### 注意事項 4 : 複数業務グループ

双方向スタンバイの運用形態では、(障害による縮退時) 1 つのサーバ上で同一アプリケーションによる複数業務グループが稼動することを想定しなくてはなりません。

単一サーバが複数の業務グループを同時に実行できる必要があります。また、アプリケーションは、次のいずれかの方法で資源を引き継ぐことができなければなりません。

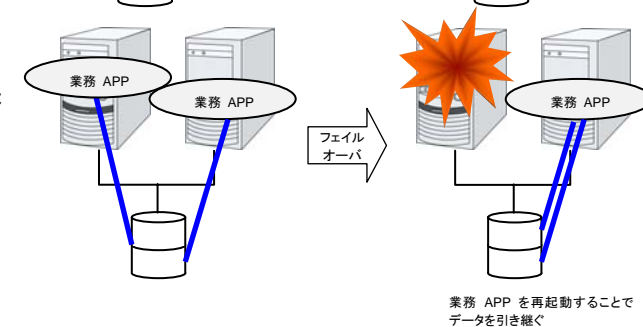
#### 複数インスタンス起動

新たに別インスタンス（プロセス）を起動する方法です。アプリケーションが複数動作できる必要があります。



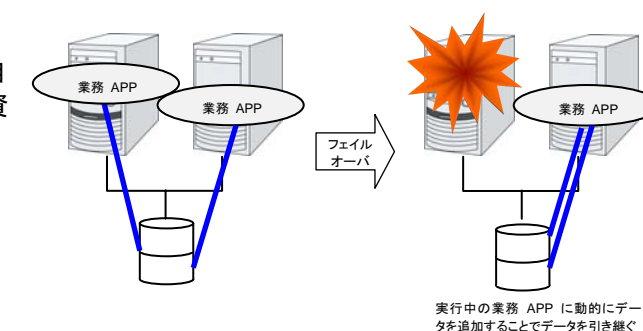
#### アプリケーション再起動

もともと動いていたアプリケーションを一旦停止し、再起動することで、追加された資源を扱えるようにする方法です。



#### 動的追加

動作中のアプリケーションに対して、自動またはスクリプトからの指示により資源を追加する方法です。



## 注意事項 5: アプリケーションとの相互干渉、相性問題

CLUSTERPRO の機能や動作に必要な OS 機能との相互干渉によってアプリケーションまたは CLUSTERPRO が動作できない場合があります。

### ◆ マルチホーム環境及び IP アドレスの移動

クラスタシステムでは、通常、一つのサーバが複数の IP アドレスを持ち、ある IP アドレス (フローティング IP アドレスなど) はサーバ間で移動します。

### ◆ アプリケーションの共有ディスクへのアクセス

共存動作アプリケーションには、業務グループの停止が通知されません。もし、業務グループの停止のタイミングでそのグループが使用しているディスクリソースにアクセスしている場合、アンマウントに失敗してしまいます。

システム監視サービスを行うようなアプリケーションの中には、定期的に全てのディスクパーティションにアクセスするようなものがあります。この場合、監視対象パーティションを指定できる機能などが必要になります。

## 注意事項に対する対策

問題点	対策	注意事項に対応する番号
データファイル更新中に障害が発生した場合、待機系にてアプリケーションが正常に動作しない	プログラム修正	注意事項 1
アプリケーションを停止しても一定時間の間、ディスクやファイルシステムへアクセスしつづける	停止スクリプト中にsleepコマンドを使用し待ち合わせる	注意事項 2
一台のサーバ上で同一アプリケーションを複数起動できない	双方向スタンバイ運用では、フェイルオーバー時にアプリケーションを再起動し共有データを引き継ぐ	注意事項 3

## 業務形態の決定

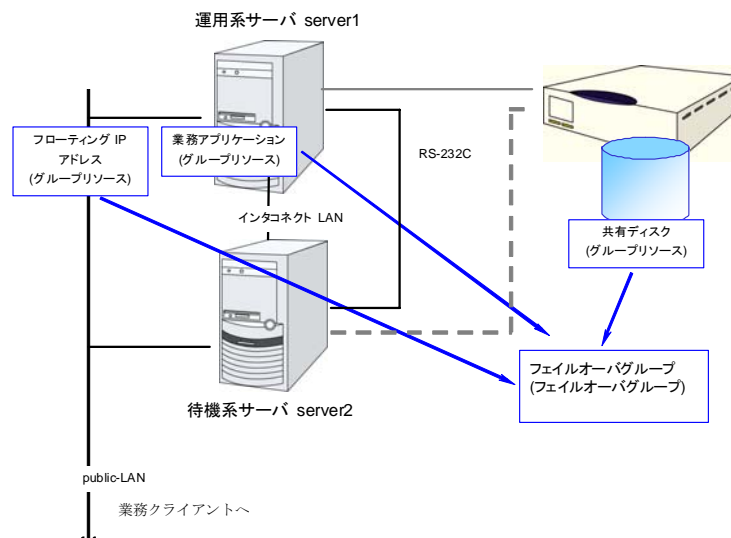
本章全体を踏まえた上で、業務形態を決定してください。

- ◆ どのアプリケーションをいつ起動するか
- ◆ 起動時やフェイルオーバー時に必要な処理は何か
- ◆ ディスクリソースに置くべき情報は何か

## クラスタ構成を設計する

グループとは、クラスタシステム内のある 1 つの独立した業務を実行するために必要な資源の集まりのことで、フェイルオーバーを行なう単位になります。

グループは、グループ名、グループリソース、属性を持ちます。



各グループのリソースは、それぞれひとまとまりのグループとして処理されます。すなわち、ディスクリソース 1 とフローティング IP アドレス 1 を持つ Group1 においてフェイルオーバーが発生した場合、ディスクリソース 1 とフローティング IP アドレス 1 がフェイルオーバーすることになります (ディスクリソース 1 のみが、フェイルオーバーすることはありません)。

また、ディスクリソース 1 は、他のグループ (たとえば Group2) に含まれることはありません。

## グループリソースを理解する

クラスタシステムでフェイルオーバーを実現するには、フェイルオーバーの単位となるグループを作成する必要があります。グループを構成するのは、グループリソースです。最適なクラスタを作成するためには、作成するグループにどのようなグループリソースを追加し、どのような設定で運用するかをよく理解する必要があります。

---

**関連情報:** 各リソースの詳細は、『リファレンスガイド』を参照してください。

---

現在サポートされているグループリソースは以下です。

グループリソース名	略称
EXECリソース	exec
ディスクリソース	disk
フローティングIPリソース	fip
仮想IPリソース	vip
NASリソース	nas
ボリュームマネージャリソース	volmgr

## モニタリソースを理解する

モニタリソースは、指定された監視対象を監視します。監視対象の異常を検出した場合には、グループリソースの再起動やフェイルオーバーなどを行います。

現在サポートされているモニタリソースは以下です。

モニタリソース名	略称
ディスクモニタリソース	diskw
IP モニタリソース	ipw
NIC Link Up/Down モニタリソース	miiw
PID モニタリソース	pidw
ユーザ空間モニタリソース	userw
カスタムモニタリソース	genw
マルチターゲットモニタリソース	mtw
仮想IPモニタリソース	vipw
ボリュームマネージャモニタリソース	volmgrw
MySQLモニタリソース	mysqlw
NFSモニタリソース	nfsw
Oracleモニタリソース	oraclew
PostgreSQLモニタリソース	psqlw
Sambaモニタリソース	sambaw

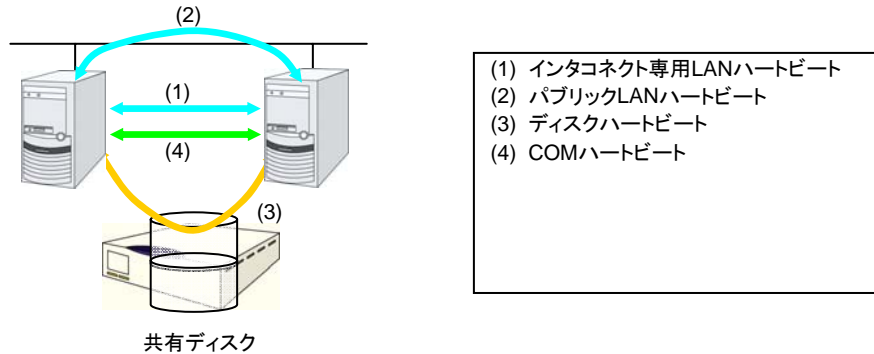
モニタリソースの監視可能な状態の範囲は常時監視と活性時監視の 2 つがあります。

- ◆ 常時監視 (クラスタ起動時～クラスタ停止時)
  - ディスクモニタリソース
  - IP モニタリソース
  - ユーザ空間モニタリソース
  - NIC Link Up/Down モニタリソース
  - マルチターゲットモニタリソース
  - カスタムモニタリソース
  - ボリュームマネージャモニタリソース
- ◆ 活性時監視 (グループ活性時～グループ非活性時)
  - PID モニタリソース
  - 仮想 IP モニタリソース
  - MySQL モニタリソース
  - NFS モニタリソース

- Oracle モニタリソース
- PostgreSQL モニタリソース
- Samba モニタリソース

# ハートビートリソースを理解する

クラスタ内のサーバは他のサーバの死活監視をおこないます。サーバ間の死活監視はハートビートリソースを使用します。ハートビートデバイスには以下の種類があります。



ハートビートリソース名	略称	機能概要
LANハートビートリソース (1)(2)	lanhb	LAN を使用してサーバの死活監視をおこないます クラスタ内の通信でも使用します
ディスクハートビートリソース (3)	diskhb	共有ディスク上の専用パーティションを使用してサーバの死活監視をおこないます
COMハートビートリソース (4)	comhb	2 台のサーバ間を COM ケーブルで接続してサーバの死活監視をおこないます

- ◆ LAN ハートビートは最低一つ設定する必要があります。二つ以上の設定を推奨します。
- ◆ ディスクハートビート及び COM ハートビートの I/F は、以下の基準で設定してください。

共有ディスクを使用するとき	[サーバ数 2 台まで] 基本的に COM I/F 方式とディスク I/F 方式 [サーバ数 3 台以上] ディスク I/F 方式
共有ディスクを使用しないとき	[サーバ数 2 台まで] COM I/F 方式

## ネットワークパーティション解決リソースを理解する

ネットワークパーティション症状(Split Brain syndrome)とはクラスタサーバ間の全ての通信路に障害が発生しネットワーク的に分断されてしまう状態のことです。

ネットワークパーティション症状に対応できていないクラスタシステムでは、通信路の障害とサーバの障害を区別できず、同一資源に複数のサーバからアクセスしデータ破壊を引き起こす場合があります。CLUSTERPRO では、他サーバからのハートビート切れを検出すると、サーバの障害かネットワークパーティション症状かを判別します。サーバダウンと判定した場合は、健全なサーバ上で各種資源を活性化し業務アプリケーションを起動することでフェイルオーバーを実行します。ネットワークパーティション症状と判定した場合には、業務継続よりデータ保護を優先させるため、緊急シャットダウンなどの処理を実施します。

ネットワークパーティション解決方式には下記の方法があります。

- ◆ ping方式
  - pingコマンドを受信し、応答を返却可能な常時稼働している装置(以下、「ping用装置」と省略します)が必要です。
  - ping用装置は複数指定することができます。
  - 他サーバからのハートビートの途絶を検出した際に、ping 用装置から ping コマンドの応答がある場合にはハートビートの途絶したサーバがダウンしたと判断してフェイルオーバーを実施し、ping コマンドの応答がない場合はネットワークパーティション症状により自身がネットワークから孤立したものと判断して緊急シャットダウンします。これにより、ネットワークパーティション症状が発生した際に、クライアントと通信可能な方のサーバで業務を継続することができます。
  - ping 用装置の障害などにより、ハートビートが途絶する前に ping コマンドの応答が返らない状態が続くと、ネットワークパーティションの解決ができなくなりますので、この状態でハートビート切れを検出した場合、全サーバがフェイルオーバーを実行します。このため、共有ディスクを使用するクラスタの場合、この方式では同一資源に複数のサーバからアクセスしてデータ破壊を引き起こす可能性があります。
- ◆ ネットワークパーティション解決しない
  - 万一、クラスタサーバ間の全てのネットワーク通信路に障害が発生した場合には、全サーバがフェイルオーバーを実行します。

推奨するネットワークパーティション解決方式は下記です。

- 遠隔クラスタにはping方式を推奨します。

ネットワークパーティション解決方式	ノード数	必要 HW	フェイルオーバー不可のケース	全ネットワーク経路断線時	両サーバがフェイルオーバーするケース	ネットワークパーティション解決に必要な時間
Ping	制限なし	ping コマンドを受信し応答を返却する装置	なし	ping コマンドの応答が有るサーバが生存	ping コマンドが指定回数連続タイムアウト後に、全ネットワーク断線	0
なし	制限なし	なし	なし	全サーバがフェイルオーバー実施	全ネットワーク断線時	0



# セクション II CLUSTERPRO X のインストールと設定

このセクションでは、CLUSTERPRO のインストールを実行します。サーバマシンへ CLUSTERPRO をインストールし、セクション I で作成した構成情報を用いてクラスタシステムを構築します。その後、システムが正常に稼動するかどうかの動作確認を行います。

- 第 3 章 CLUSTERPROをインストールする
- 第 4 章 ライセンスを登録する
- 第 5 章 Builder でクラスタ構成情報を作成する
- 第 6 章 クラスタシステムを確認する
- 第 7 章 クラスタ構成情報を変更する



## 第 3 章                    CLUSTERPRO をインストールする

本章では、CLUSTERPRO のインストール手順について説明します。CLUSTERPRO のインストールには、CLUSTERPRO 本体である CLUSTERPRO Server をインストールします。管理用ツールの CLUSTERPRO WebManager は、管理用 PC のブラウザから CLUSTERPRO Server へ接続したときに自動的にダウンロードされます。WebManager、Builder のインストール作業は必要ありません。

本章で説明する項目は以下のとおりです。

- CLUSTERPRO のインストールからクラスタ生成までの流れ ..... 52
- CLUSTERPRO Server のセットアップ ..... 53

## CLUSTERPRO のインストールからクラスタ生成までの流れ

本セクションで説明する CLUSTERPRO のインストールからライセンス登録、クラスタ システム生成、クラスタ システムの確認までの流れを以下に示します。

本セクションの手順に進む前に、必ずセクション 1 を読み、必要な動作環境や生成するクラスタの構成内容について確認してください。

### 1. CLUSTERPRO Server のインストール

クラスタを構成する各サーバに、CLUSTERPRO のメインのモジュールである CLUSTERPRO Server をインストールします。(第 3 章 CLUSTERPRO をインストールする)

### 2. ライセンスの登録

clplcnsd コマンドでライセンスを登録します。(第 4 章 ライセンスを登録する)

**(サーバ OS の再起動が必要)**

### 3. CLUSTERPRO Builder を使用したクラスタ構成情報の作成

CLUSTERPRO Builder を利用して、クラスタ構成情報を作成します(第 5 章 Builder でクラスタ構成情報を作成する)。

### 4. クラスタの生成

Builder で作成したクラスタ構成情報を使ってクラスタを生成します(第 5 章 Builder でクラスタ構成情報を作成する)。

### 5. CLUSTERPRO WebManager を使用した設定確認

CLUSTERPRO WebManager を利用して、生成したクラスタの状態を確認します。(第 6 章 クラスタシステムを確認する)

---

**関連情報:** 本書流れに従って操作を行うためには、本ガイドの手順に従いながら、随時『CLUSTERPRO X リファレンスガイド』を参照する必要があります。また、動作環境やリリース情報などの最新情報は、『CLUSTERPRO X スタートアップガイド』を確認してください。

---

## CLUSTERPRO Server のセットアップ

CLUSTERPRO の本体モジュールである CLUSTERPRO Server は以下のシステム サービスで構成され、CLUSTERPRO Server パッケージのインストールによりセットアップされます。

システム サービス名	説明
clusterpro	CLUSTERPRO デーモン CLUSTERPRO 本体のサービスです。
clusterpro_evt	CLUSTERPRO イベント CLUSTERPRO が出力するログおよび syslog を制御するサービスです。
clusterpro_trn	CLUSTERPRO データ転送 クラスタ内のライセンス同期や構成情報の転送を制御するサービスです。
clusterpro_alertsync	CLUSTERPRO アラート同期 クラスタ内のサーバでアラートを同期するためのサービスです。
clusterpro_webmgr	CLUSTERPRO WebManager WebManager のサービスです。

## CLUSTERPRO パッケージをインストールするには

以下の手順に従って、クラスタを構成する各サーバに CLUSTERPRO Server の パッケージをインストールします。

---

**注:** CLUSTERPRO Server の パッケージは root ユーザでインストールしてください。

---

1. インストール CD-ROM を mount します。
2. pkgadd コマンドを実行して、パッケージ ファイルをインストールします。  
CD-ROM 内の /Solaris/2.1/jp/server に移動して、  
`pkgadd -d NECclusterpro-<バージョン>-<アーキテクチャ>.pkg`  
を実行します。

インストールが開始されます。

---

**注:**

CLUSTERPRO は以下の場所にインストールされます。このディレクトリを変更するとアンインストールできなくなりますので注意してください。

インストール ディレクトリ: /opt/nec/clusterpro

---

3. インストールが終了したら、インストール CD-ROM を umount します。
4. インストール CD-ROM を取り出します。  
オフライン版の CLUSTERPRO Builder を使用しない場合には、ライセンス登録の手順に進んでください。

## オフライン版 CLUSTERPRO Builder をインストールするには

オフライン版 CLUSTERPRO Builder はクラスタを構成するサーバにインストールする必要はありません。クラスタを構成するサーバ以外の PC でクラスタ構成情報を変更する場合にのみインストールしてください。

以下の手順に従って、オフライン版 CLUSTERPRO Builder をインストールします。

### Windows マシンへインストールするには

Windows に CLUSTERPRO Builder をインストールする場合は、ユーザに与えられたセキュリティ権限において、ファイル アクセス (読み書き) が可能な場所へインストールしてください。

1. インストール CD-ROM を CD-ROM ドライブに挿入します。
2. CD-ROM 内の ¥Solaris¥2.1¥jp¥builder¥ に移動して、  
`NECclusterprobuilder-<バージョン番号>-<リリース番号>.solaris.x86.exe`  
を実行します。
3. 以下のダイアログ ボックスが表示されます。



インストール先を指定して、[解凍] をクリックします (デフォルトでは "Program Files" が設定されています)。

ここで指定した場所の下に "CLUSTERPRO¥clpbuilder-s" ディレクトリが作成され、そのディレクトリ配下に Builder がインストールされます。

インストールが完了すると、以下のダイアログ ボックスが表示されます。



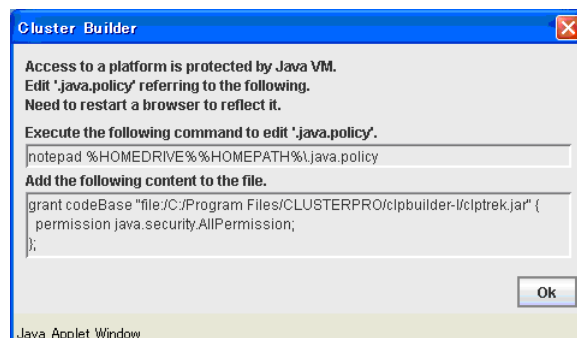
注: インストール後にインストールフォルダを移動する場合は、"clpbuilder-s" ディレクトリごと、配下の構成を変更せずに移動してください。

## Builder を起動する

1. Web ブラウザで以下のファイルを読み込み、Builder を起動します。

<file:///インストールパス/clptrek.htm>

初めて Builder を起動する場合、以下の画面が表示されます。



2. Java のユーザポリシファイルを設定して、Builder (Java アプレット) がプラットフォーム OS (Java VM の外) にアクセスする権限を与えます。

### 管理 PC が Windows OS の場合

[スタート] メニューの [ファイル名を指定して実行] で、上記の画面に表示されるコマンド `notepad %HOMEDRIVE%%HOMEPATH%¥.java.policy` を実行します。ホームディレクトリにある `.java.policy` ファイルが表示されます。ホームディレクトリに `.java.policy` ファイルがない場合は、ファイルを新しく作成するかを問うメッセージが表示されるので、[はい] をクリックして作成します。

---

注: ホームディレクトリは、OS が C ドライブにインストールされていて `USERNAME` でログインしている場合、`C:¥Documents and Settings¥USERNAME` となります。※環境によっては上記と異なる場合もあります。

---

3. `.java.policy` ファイルに、上記画面の [Add the following content to the file.] の下に表示されている文字列をコピーして、保存します。
4. Web ブラウザをすべて閉じます。
5. 再度、Builder を起動し、正常に起動することを確認します。

---

注: Builder が上手く起動しない場合、以下を再度確認してください。

- JRE がコンピュータにインストールされている
  - JRE がブラウザで有効になっている
  - `.Java.policy` ファイルがホームディレクトリに存在し、Builder のインストールパスが指定されている
-



## 第 4 章                    ライセンスを登録する

作成したクラスタを実際に稼動させるには、ライセンスの登録が必要になります。本章では、CLUSTERPRO のライセンス登録手順について説明します。

本章で説明する項目は以下のとおりです。

- CPU ライセンスの登録..... 58
- ノードライセンスの登録 ..... 62

## CPU ライセンスの登録

構築するクラスタシステムを実際に動作させるには、CPU ライセンスを登録する必要があります。

CPU ライセンスの登録は、クラスタを構築しようとしているサーバのうち、マスタ サーバとして設定しているサーバで行います。登録形式には、ライセンスシートに記載された情報を記載する方法と、ライセンスファイルを指定する方法の 2 つがあります。製品版、試用版それぞれの場合について説明します。

### 製品版

- ◆ ライセンス管理コマンドのパラメータにライセンス ファイルを指定し、ライセンスを登録する。(ライセンス ファイル指定によるライセンス登録を行うには (製品版、試用版共通) を参照)
- ◆ ライセンス管理コマンドを実行し、対話形式でライセンス製品に添付されたライセンス情報を入力しライセンスを登録する。(コマンド ラインから対話形式でライセンスを登録するには(製品版) を参照)

### 試用版

- ◆ ライセンス管理コマンドのパラメータにライセンス ファイルを指定し、ライセンスを登録する。(ライセンス ファイル指定によるライセンス登録を行うには (製品版、試用版共通) を参照)

## ライセンス ファイル指定によるライセンス登録を行うには (製品版、試用版共通)

製品版、または試用版のライセンスを入手している場合で、ライセンス ファイル指定によるライセンス登録の手順を示します。

- ◆ クラスタ システムを構築しようとしているサーバの中で、マスタ サーバとして設定しようとしているサーバに root でログイン可能である。
  - ◆ ライセンス ファイルが、クラスタ システムを構築しようとしているサーバの中で、マスタ サーバとして設定しようとしているサーバの任意の位置に存在している。
1. クラスタを構築しようとしているサーバのうち、マスタ サーバとして設定しようとしているサーバに root でログインし、以下のコマンドを実行します。

```
# clplcns -i filepath -p PRODUCT-ID
```

-i オプションで指定する *filepath* には、ライセンス ファイルへのファイル パスを指定します。

-p オプションで指定する *PRODUCT-ID* には、製品 ID を指定します。以下に製品 ID の一覧を記載します。以下に、ご使用のライセンス番号の一覧を示します。

ライセンス製品名	製品 ID
CLUSTERPRO X2.1 for Solaris	BASE21

コマンド実行後、正常にコマンドが終了した場合は、コンソールに「Command succeeded.」と表示されます。その他の終了メッセージが表示された場合は、『CLUSTERPRO リファレンスガイド』の第 4 章「CLUSTERPRO コマンド リファレンス」を参照してください。

2. 以下のコマンドを実行し、ライセンスの登録状況を確認します。*PRODUCT-ID* には、製品 ID を入力します。*PRODUCT-ID* には、本ステップの 1 で指定した製品 ID を入力します。

```
# clplcns -l -p PRODUCT-ID
```

3. オプション製品を使用する場合には「ノードライセンスの登録」に進んでください。
4. オプション製品を使用しない場合には、この後、ライセンス登録を有効にしクラスタを稼働させるため全サーバをOSのシャットダウンコマンドで再起動してください。再起動後、次の第 5 章「Builder でクラスタ構成情報を作成する」に進み、手順に従ってください。

## コマンド ラインから対話形式でライセンスを登録するには(製品版)

製品版のライセンスを保有している場合に、コマンドラインを使用して対話形でライセンスを登録する手順を示します。

本手順を実行する前に、以下を確認してください。

- ◆ 販売元から正式に入手したライセンス シートが手元にある。ライセンスシートは製品を購入すると販売元から送付されます。このライセンス シートに記載されている値を入力します。
- ◆ クラスタ システムを構築しようとしているサーバの中で、マスタ サーバとして設定しようとしているサーバに root でログイン可能である。

**関連情報:** 本手順では、`clplcns` コマンドを使用します。`clplcns` コマンドの使用の詳細については、『リファレンス ガイド』の「第 4 章 CLUSTERPRO コマンド リファレンス」を参照してください。

### 1. ライセンス シートを手元に用意します。

本ステップでは、添付されているライセンス シートが以下の場合を例にとり説明を行います。入力時には、お手元のライセンス シートに記載される値に置き換えてください。

製品名	<b>CLUSTERPRO X 2.1 for Solaris</b>
ライセンス情報	
製品区分	製品版
ライセンスキー	A1234567- B1234567- C1234567- D1234567
シリアルナンバー	AAA0000000
CPU 数	2

### 2. クラスタを構築しようとしているサーバのうち、マスタ サーバとして設定しようとしているサーバに root でログインし、以下のコマンドを実行します。

```
# clplcns -i -p PRODUCT-ID
```

-p オプションで指定する `PRODUCT-ID` には、製品 ID を指定します。以下に製品 ID の一覧を記載します。ご使用のエディションに対応する製品 ID を入力してください。

ライセンス製品名	製品 ID
CLUSTERPRO X 2.1 for Solaris	BASE21

### 3. 製品区分の入力を促す以下の文字列が表示されます。License Version (製品区分) は 1 の Product (製品版) ですので、1 と入力します。

```
Selection of License Version.
 1 Product version
 2 Trial version
Select License Version. [1 or 2]...1
```

### 4. ライセンス数の入力を促す以下の文字列が表示されます。ライセンス数は、既定値の 2 が表示されています。ライセンスシートに記載されているライセンス数が 2 の場合は、値を入力せずにそのまま Enter を押下します。ライセンスシートに記載されている値が 2 以外の場合は、その値を入力してから、Enter を押下します。

```
Enter the number of license [1 to 99 (default:2)]... 2
```

5. シリアル No. の入力を促す以下の文字列が表示されます。ライセンス シートに記載されているシリアル No. を入力します。大文字と小文字は区別されますので気をつけてください。

```
Enter serial number [Ex. XXX0000000]... AAA0000000
```

6. ライセンス キーの入力を促す以下の文字列が表示されます。ライセンス シートに記載されているライセンス キーを入力します。大文字と小文字は区別されますので気をつけてください。

```
Enter license key  
[XXXXXXXX-XXXXXXXX-XXXXXXXX-XXXXXXXX]...  
A1234567-B1234567-C1234567-D1234567
```

コマンド実行後、正常にコマンドが終了した場合は、コンソールに「Command succeeded.」と表示されます。その他の終了メッセージが表示された場合は、『CLUSTERPRO リファレンスガイド』の「第 4 章 CLUSTERPRO コマンド リファレンス」を参照してください。

7. 登録したライセンスを確認します。以下のコマンドを実行します。*PRODUCT-ID* には、本ステップの 2 で指定した製品 ID を入力します。

```
# clplcns -l -p PRODUCT-ID
```

8. オプション製品を使用する場合には「ノードライセンスの登録」に進んでください。
9. オプション製品を使用しない場合には、全サーバをOSのシャットダウンコマンドで再起動してください。  
再起動後、次の第 5 章「Builder でクラスタ構成情報を作成する」に進み、手順に従ってください。

## ノードライセンスの登録

X 2.1 Agent 製品群、X 2.1 Alert Service (以下、各オプション製品) を構築するクラスシステムを動作させるには、ノードライセンスを登録する必要があります。

ノードライセンスの登録は、クラスタを構築するサーバのうち、オプション製品を使用するサーバで行います。登録形式には、ライセンスシートに記載された情報を記載する方法と、ライセンスファイルを指定する方法の 2 つがあります。製品版、試用版それぞれの場合について説明します。

### 製品版

- ◆ ライセンス管理コマンドを実行し、対話形式でライセンス製品に添付されたライセンス情報を入力しライセンスを登録する。(コマンド ラインから対話形式でライセンスを登録するには(製品版) を参照)
- ◆ ライセンス管理コマンドのパラメータにライセンス ファイルを指定し、ライセンスを登録する。(ライセンス ファイル指定によるライセンス登録を行うには (製品版、試用版共通) を参照)

### 試用版

- ◆ ライセンス管理コマンドのパラメータにライセンス ファイルを指定し、ライセンスを登録する。(ライセンス ファイル指定によるライセンス登録を行うには (製品版、試用版共通) を参照)

## ライセンス ファイル指定によるライセンス登録 (製品版、試用版共通)

製品版、または試用版のライセンスを入手している場合で、ライセンス ファイル指定によるライセンス登録の手順を示します。

- ◆ オプション製品を使用しようとしているサーバに root でログイン可能である。

1. クラスタを構築しようとしているサーバのうち、オプション製品を使用しようとしているサーバに root でログインし、以下のコマンドを実行します。

```
# clplcnscl -i filepath -p PRODUCT-ID
```

-i オプションで指定する *filepath* には、ライセンス ファイルへのファイル パスを指定します。

-p オプションで指定する *PRODUCT-ID* には、製品 ID を指定します。以下に製品 ID の一覧を記載します。以下に、ご使用のライセンス番号の一覧を示します。

ライセンス製品名	製品 ID
CLUSTERPRO X Database Agent 2.1 for Solaris	DBAG21
CLUSTERPRO X File Server Agent 2.1 for Solaris	FSAG21
CLUSTERPRO X Alert Service 2.1 for Solaris	ALRT21

コマンド実行後、正常にコマンドが終了した場合は、コンソールに「Command succeeded.」と表示されます。その他の終了メッセージが表示された場合は、『CLUSTERPRO リファレンスガイド』の第 4 章「CLUSTERPRO コマンド リファレンス」を参照してください。

2. 以下のコマンドを実行し、ライセンスの登録状況を確認します。*PRODUCT-ID* には、製品 ID を入力します。*PRODUCT-ID* には、本ステップの 1 で指定した製品 ID を入力します。

```
# clplcnscl -l -p PRODUCT-ID
```

3. クラスタ内で他にオプション製品を使用するサーバがあれば、同様の手順でノードライセンスを登録します。
4. この後、ライセンス登録を有効にしクラスタを稼働させるため、全サーバをOSのシャットダウンコマンドで再起動してください。  
再起動後、第 5 章「Builder でクラスタ構成情報を作成する」に進み、手順に従ってください。

## コマンド ラインから対話形式でノードライセンスを登録するには(製品版)

製品版のライセンスを保有している場合に、コマンドラインを使用して対話形でライセンスを登録する手順を示します。

本手順を実行する前に、以下を確認してください。

- ◆ 販売元から正式に入手したライセンス シートが手元にある。ライセンスシートは製品を購入すると販売元から送付されます。ノードライセンスのライセンス シートはオプション製品を使用しようとしているサーバの台数分必要です。このライセンス シートに記載されている値を入力します。
- ◆ クラスタ システムを構築しようとしているサーバの中で、オプション製品を使用しようとしているサーバに root でログイン可能である。

**関連情報:** 本手順では、`clplcns` コマンドを使用します。`clplcns` コマンドの使用方法の詳細については、『リファレンス ガイド』の「第 4 章 CLUSTERPRO コマンド リファレンス」を参照してください。

### 1. ライセンス シートを手元に用意します。

本ステップでは、添付されているライセンス シートが以下 (Database Agent) の場合を例にとり説明を行います。入力時には、お手元のライセンス シートに記載される値に置き換えてください。

製品名	<b>CLUSTERPRO X Database Agent 2.1 for Solaris</b>
ライセンス情報	
製品区分	製品版
ライセンスキー	A1234567- B1234567- C1234567- D1234567
シリアルナンバー	AAA0000000
ノード数	1

### 2. クラスタを構築しようとしているサーバのうち、オプション製品を使用しようとして設定しようとしているサーバに root でログインし、以下のコマンドを実行します。

```
# clplcns -i -p PRODUCT-ID
```

-p オプションで指定する *PRODUCT-ID* には、製品 ID を指定します。以下に製品 ID の一覧を記載します。ご使用のオプション製品に対応する製品 ID を入力してください。

ライセンス製品名	製品 ID
CLUSTERPRO X Database Agent 2.1 for Solaris	DBAG21
CLUSTERPRO X File Server Agent 2.1 for Solaris	FSAG21
CLUSTERPRO X Alert Service 2.1 for Solaris	ALRT21

### 3. 製品区分の入力を促す以下の文字列が表示されます。License Version (製品区分) は 1 の Product (製品版) ですので、1 と入力します。

```
Selection of License Version.
 1 Product Version
 2 Trial Version
Select License Version. [1 or 2]...1
```



4. シリアル No. の入力を促す以下の文字列が表示されます。ライセンス シートに記載されているシリアル No. を入力します。大文字と小文字は区別されますので気をつけてください。

```
Enter serial number [Ex. XXX0000000]... AAA0000000
```

5. ライセンス キーの入力を促す以下の文字列が表示されます。ライセンス シートに記載されているライセンス キーを入力します。大文字と小文字は区別されますので気をつけてください。

```
Enter license key  
[XXXXXXXX-XXXXXXXX-XXXXXXXX-XXXXXXXX] ...  
A1234567-B1234567-C1234567-D1234567
```

コマンド実行後、正常にコマンドが終了した場合は、コンソールに「Command succeeded.」と表示されます。その他の終了メッセージが表示された場合は、『CLUSTERPRO リファレンスガイド』の「第 4 章 CLUSTERPRO コマンド リファレンス」を参照してください。

6. 登録したライセンスを確認します。以下のコマンドを実行します。*PRODUCT-ID* には、本ステップの 2 で指定した製品 ID を入力します。

```
# clplcns -l -p PRODUCT-ID
```

7. クラスタ内で他にオプション製品を使用するサーバがあれば、同様の手順でノードライセンスを登録します。この後、ライセンス登録を有効にしクラスタを稼働させるため、全サーバをOSのシャットダウンコマンドで再起動してください。  
再起動後、次の第 5 章「Builder でクラスタ構成情報を作成する」に進み、手順に従ってください。



# 第 5 章                   Builder でクラスタ構成情報を作成する

CLUTERPRO では、クラスタシステムの構成内容を記述するデータのことを、クラスタ構成情報と呼びます。通常は、WebManager から起動した Builder を用いてクラスタ構成情報を作成します。本章では、WebManager の起動方法、および Builder によるクラスタ構成情報の作成手順をサンプルの構成例を用いて説明します。

本章で説明する項目は以下のとおりです。

• クラスタ構成情報を作成する .....	68
• WebManager を起動する .....	69
• Builder を起動する .....	71
• 2 ノードクラスタ環境の設定値を確認する .....	72
• 2 ノードクラスタ構成情報の作成手順 .....	75
• クラスタ構成情報を保存する .....	89
• クラスタを生成する .....	90

## クラスタ構成情報を作成する

クラスタ構成情報の作成は、クラスタ構成情報の作成 / 変更用の機能である CLUSTERPRO Builder (以下 Builder) を用いて行います。

管理用 PC からアクセスした CLUSTERPRO WebManager (以下 WebManager) から Builder を起動し、クラスタ構成情報を作成します。作成したクラスタ構成情報は、Builder からクラスタシステムに反映します。

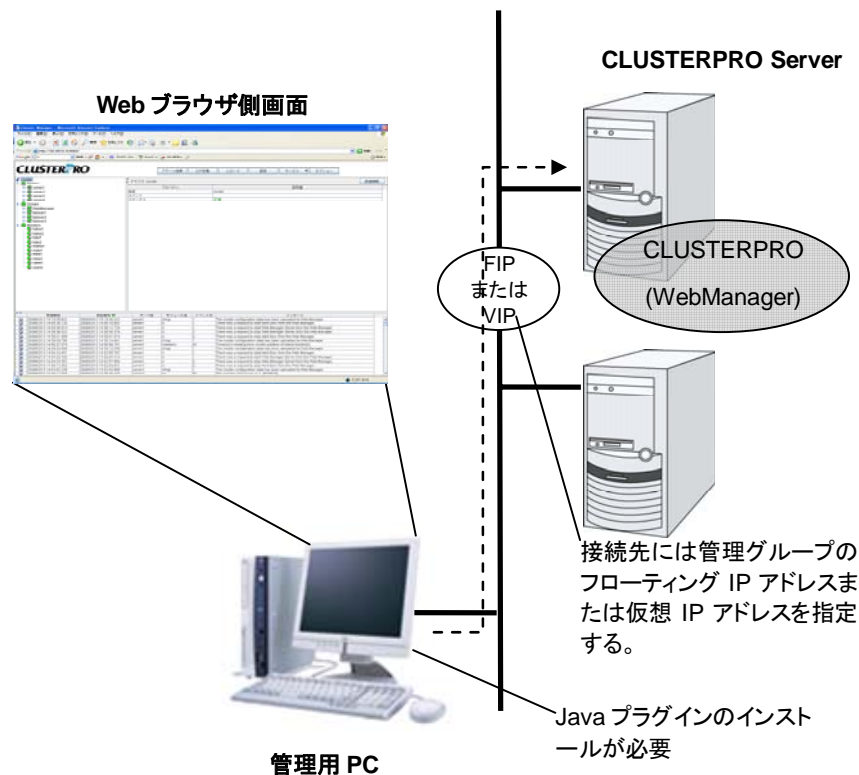
# WebManager を起動する

クラスタ構成情報を作成するには、WebManager にアクセスする必要があります。ここでは、まず WebManager の概要を説明し、その後、WebManager にアクセスして、クラスタ構成情報を作成する方法について説明します。

**関連情報:** WebManager の動作環境については、『スタートアップ ガイド』の「第 3 章 CLUSTERPRO の動作環境」を参照してください。

## WebManager とは

WebManager とは、Web ブラウザ経由で Builder の起動、クラスタの状態監視、サーバ/グループの起動/停止及び、クラスタ動作ログの収集などを行うための機能です。以下の図に WebManager の概要を示します。



CLUSTERPRO Server 側の WebManager サービスは OS の起動と同時に起動するようになっています。

## WebManager がサポートしているブラウザ

WebManager の動作確認済 OS、動作確認済ブラウザ、Java 実行環境、必要メモリ容量/ディスク容量などの最新の動作環境情報については、『スタートアップガイド』を参照してください。

## 管理用 PC への Java 実行環境の設定

WebManager に接続するためには、管理用 PC の Web ブラウザに Java プラグインがインストールされている必要があります。

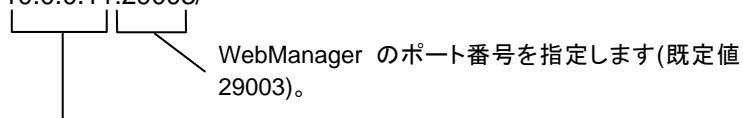
Web ブラウザに Java プラグインを組み込む方法については、Web ブラウザのヘルプ、並びに JavaVM のインストールガイドを参照してください。

## WebManager を起動するには

Builder を使用するために、WebManager を起動します。

1. Web ブラウザを起動します。
2. ブラウザのアドレス バーに、CLUSTERPRO Server をインストールしたサーバの実 IP アドレスとポート番号を入力します。

http://10.0.0.11:29003/



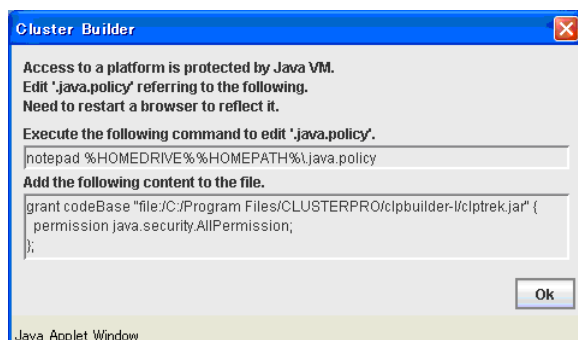
CLUSTERPRO Serverをインストールしたサーバの実IP  
アドレスを指定します。

WebManager が起動します。

## Builder を起動する

**注:** WebManager のマウスカーソルが砂時計の状態で、WebManager のタイトルバーの[設定]を数回押すと Builder がフリーズすることがあります。マウスカーソルが砂時計の状態で、操作を行わないようにしてください。

1. WebManager のタイトルバーで、[設定] をクリックして Builder を起動します。初めて Builder を起動する場合、以下の画面が表示されます。



2. Java のユーザポリシファイルを設定して、Builder (Java アプレット) がプラットフォーム OS (Java VM の外) にアクセスする権限を与えます。

### 管理 PC が Windows OS の場合

[スタート] メニューの [ファイル名を指定して実行] で、上記の画面に表示されるコマンド `notepad %HOMEDRIVE%%HOMEPATH%¥.java.policy` を実行します。ホームディレクトリにある `.java.policy` ファイルが表示されます。ホームディレクトリに `.java.policy` ファイルがない場合は、ファイルを新しく作成するかを問うメッセージが表示されるので、[はい] をクリックして作成します。

**注:** ホームディレクトリは、OS が C ドライブにインストールされていて `USERNAME` でログインしている場合、`C:¥Documents and Settings¥USERNAME` となります。※環境によっては上記と異なる場合もあります。

3. `.java.policy` ファイルに、上記画面の [Add the following content to the file.] の下に表示されている文字列をコピーして、保存します。
4. Web ブラウザをすべて閉じます。
5. 再度、WebManager に接続し、[設定]をクリックして Builder を起動します。

**注:** Builder が上手く起動しない場合、以下を再度確認してください。

- JRE がコンピュータにインストールされている
- JRE がブラウザで有効になっている
- `.Java.policy` ファイルがホームディレクトリに存在し、Builder のインストールパスが指定されている

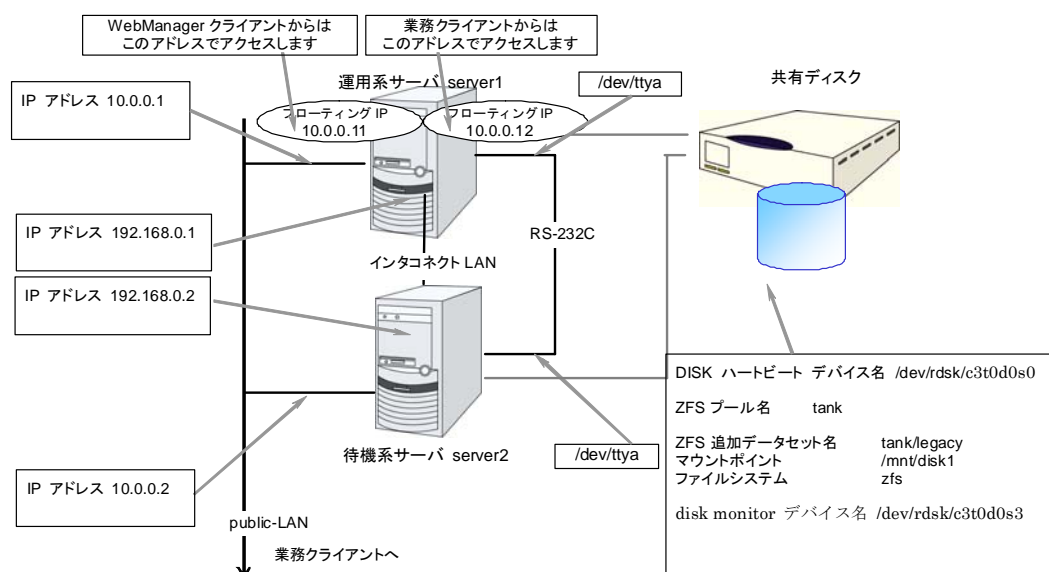
## 2 ノードクラスタ環境の設定値を確認する

Builder を使用して実際にクラスタ構成情報を作成する前に、クラスタ構成情報として設定する値を確認します。値を書き出して、クラスタが効果的に作成されているか、情報に漏れがないかを確認しておきましょう。

### クラスタ環境のサンプル

本章では、以下の図に記載されている、典型的な 2 ノードのクラスタ環境を構築する場合を例にとって説明を行います。

#### ディスクリソース使用時



以下に、上図のクラスタ システムを構築するためのクラスタ構成情報のサンプル値を記載します。以降のトピックでは、この条件でクラスタ構成情報を作成する手順をステップ バイ ステップで説明します。実際に値を設定する際には、構築するクラスタの構成情報と置き換えて入力してください。値の決定方法については、『リファレンスガイド』を参照してください。

#### 2 ノードの構成設定例

設定対象	設定パラメータ	設定値 (ディスクリソース使用時)
クラスタ構成	クラスタ名	cluster
	サーバ数	2
	フェイルオーバー グループ数	2
	モニタ リソース数	4
ハートビート リソース	LAN ハートビート数	2
	COM ハートビート数	1
	ディスク ハートビート数	1
1 台目のサーバの情報	サーバ名*1	server1



設定対象	設定パラメータ	設定値 (ディスクリソース使用時)
(マスタ サーバ)	インタコネク트의 IP アドレス (専用)	192.168.0.1
	インタコネク트의 IP アドレス (バックアップ)	10.0.0.1
	パブリックの IP アドレス	10.0.0.1
	COM ハートビート デバイス	/dev/ttya
	ディスク ハートビートデバイス	/dev/rdisk/c3t0d0s0
2 台目のサーバの情報	サーバ名*1	server2
	インタコネク트의 IP アドレス (専用)	192.168.0.2
	インタコネク트의 IP アドレス (バックアップ)	10.0.0.2
	パブリックの IP アドレス	10.0.0.2
	COM ハートビート デバイス	/dev/ttya
	ディスク ハートビートデバイス	/dev/rdisk/c3t0d0s0
管理用のグループ (WebManager 用)	タイプ	フェイルオーバー
	グループ名	ManagementGroup
	起動サーバ	全てのサーバ
	グループ リソース数	1
管理用グループのグループリソース *2	タイプ	floating ip resource
	グループ リソース名	ManagementIP
	IPアドレス	10.0.0.11
業務用のグループ	タイプ	フェイルオーバー
	グループ名	failover1
	起動サーバ	全てのサーバ
	グループ リソース数	3
1 つ目のグループリソース	タイプ	floating ip resource
	グループリソース名	fip1
	IP アドレス	10.0.0.12
2 つ目のグループリソース	タイプ	volume manager resource
	ボリュームマネージャ	volmgr1
	プール名	tank
3 つ目のグループリソース	タイプ	disk resource
	グループ リソース名	disk1

設定対象	設定パラメータ	設定値 (ディスクリソース使用時)
3 つ目のグループリソース	デバイス名	tank/legacy
	マウント ポイント	/mnt/disk1
	ファイル システム	zfs
	ディスク タイプ	disk
	タイプ	execute resource
	グループ リソース名	exec1
	スクリプト	標準スクリプト
1 つ目のモニタリソース (デフォルト作成)	タイプ	user mode monitor
	モニタ リソース名	userw
2 つ目のモニタリソース	タイプ	volume manager monitor
	モニタ リソース名	volmgrw1
	ボリュームマネージャ	zfspool
	プール名	tank
	異常検出時	クラスタ デーモン停止と OS シャットダウン
3 つ目のモニタリソース	タイプ	NIC Link Up/Down monitor
	モニタ リソース名	miiw1
	監視対象	e1000g0 (Public LANのインタフェース)
	異常検出時	“ManagementGroup” グループのフェイルオーバー *3
4 つ目のモニタリソース	タイプ	NIC Link Up/Down monitor
	モニタ リソース名	miiw2
	監視対象	e1000g0 (Public LANのインタフェース)
	異常検出時	“failover1” グループのフェイルオーバー *3

\*1: 「ホスト名」は原則として FQDN 形式からドメイン名を除いたショートネームのことを指します。

\*2: WebManager に接続するフローティング IP を 用意します。この IP により、障害発生時も Web ブラウザから動作している方のサーバが実行する WebManager にアクセスできます。

\*3: すべてのインタコネクト LAN が切断された状態でのフェイルオーバーを試行させる設定は『リファレンス ガイド』の「第 6 章 モニタ リソースの詳細」を参照してください。

## 2 ノードクラスタ構成情報の作成手順

クラスタ構成情報を作成するには、基本的に、クラスタの作成、グループの作成、モニタリソースの作成の 3 つのステップを踏みます。以下に手順の流れを示します。

**注:** クラスタ構成情報の操作は何度でも繰り返して行えます。また、設定した内容のほとんどは名称変更機能やプロパティ表示機能を使用して後から変更できます。

### 1 クラスタの作成

クラスタの生成、サーバの追加を行います。

#### 1-1 クラスタを追加する

構築するクラスタを追加し、名前を入力します。

#### 1-2 サーバ (1 台目) を追加する

サーバを追加します。IP アドレスなどを設定します。

#### 1-3 サーバ (2 台目) を追加する

サーバを追加します。IP アドレスなどを設定します。

### 2 フェイルオーバーグループの作成

フェイルオーバーを行う際の単位である、フェイルオーバーグループを作成します。

#### 2-1 管理用のグループの追加

フェイルオーバーの単位となる、グループを追加します。

#### 2-2 業務用のグループの追加

グループを構成するリソースを追加します。

#### 2-3 グループ リソース (フローティング IP アドレス)の追加

グループを構成するリソースを追加します。

#### 2-4 グループ リソース (ボリュームマネージャリソース) の追加

グループを構成するリソースを追加します。

#### 2-5 グループ リソース (ディスクリソース) の追加

グループを構成するリソースを追加します。

#### 2-6 グループ リソース (EXEC リソース) の追加

グループを構成するリソースを追加します。

### 3 モニタリソースの作成

指定された監視対象を監視する、モニタリソースをクラスタ内に追加します。

#### 3-1 モニタ リソース (volmgrw モニタ) の追加

使用するモニタリソースを追加します。

#### 3-2 モニタ リソース (diskw モニタ) の追加

使用するモニタリソースを追加します。

#### 3-3 モニタ リソース (管理グループ用の NIC Link Up/Down モニタ) の追加

使用するモニタリソースを追加します。

#### 3-4 モニタ リソース (フェイルオーバーグループ用の NIC Link Up/Down モニタ) の追加

使用するモニタリソースを追加します。

# 1 クラスタの作成

まず、クラスタを作成します。作成したクラスタに、クラスタを構成するサーバを追加し、優先度とハートビートの優先度を決定します。

## 1-1 クラスタを追加する

1. Builder の[ファイル] メニューから、[クラスタ生成ウィザード] をクリックします。[クラスタ生成ウィザード] ダイアログ ボックスが表示されます。[言語] フィールドには、WebManager を使用するマシンの OS で使用している言語を選択します。

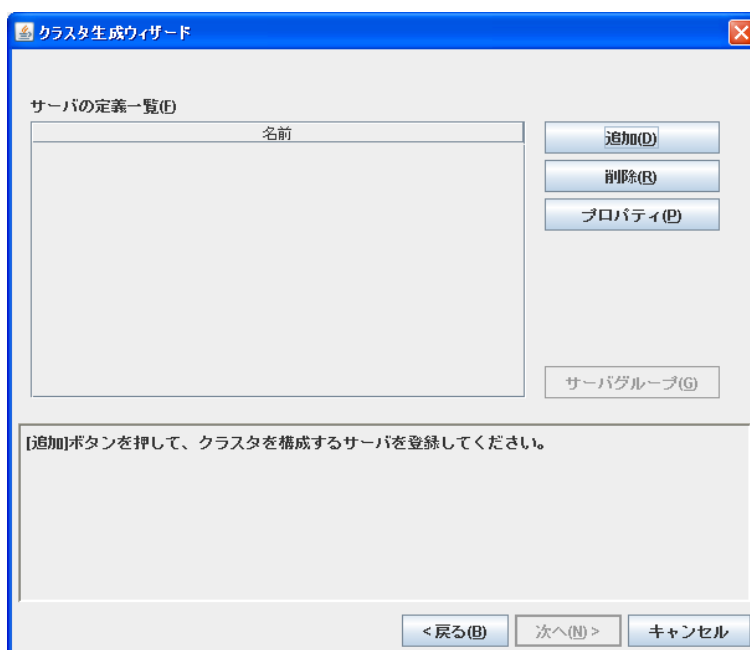
**注:** 1つのクラスタ内では、WebManager で使用できる言語は 1 つのみです。複数の言語の OS をクラスタ内で使用している場合は、文字化けを避けるために「英語」を指定してください。

2. [名前] ボックスにクラスタ名 (cluster) を入力します。[次へ] をクリックします。

## 1-2 サーバ (1 台目) を追加する

クラスタを構成するサーバの情報を 1 台ずつ設定します。

1. [サーバの定義一覧] が表示されます。



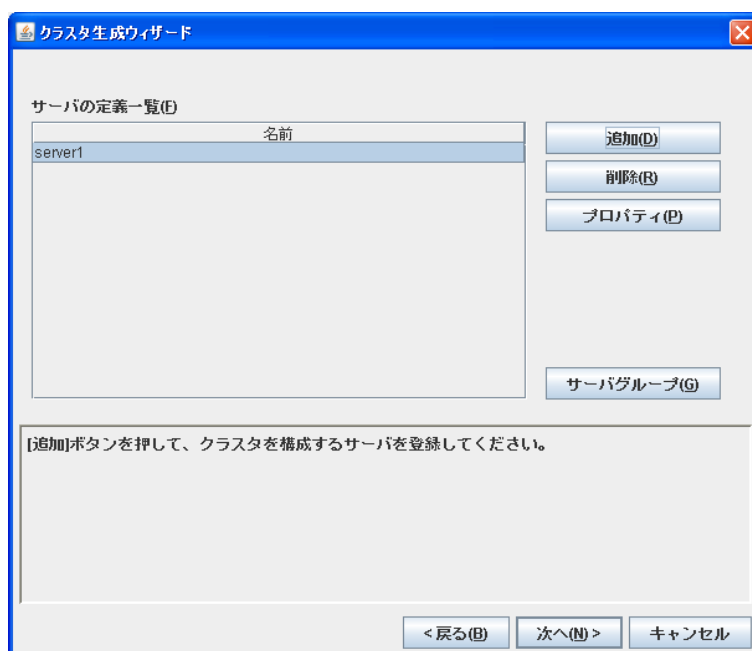
2. [サーバの定義一覧] で [追加] をクリックします。
3. [サーバの定義] ダイアログ ボックスが開きます。1 台目のサーバ情報を入力します。  
[名前] ボックスにサーバ名 (server1) を入力し、[次へ] をクリックします。

**注:** サーバ名は、実際のサーバのホスト名です。また、大文字と小文字は区別されます。

4. インタコネクト LAN の設定を行います。[追加] をクリックし、[IP アドレス] ボックスにインタコネクト LAN IP アドレス (専用) (192.168.0.1) を入力します。[OK] をクリックします。
5. 入力した IP アドレスが [インタコネクト LAN I/F 一覧] に表示されます。同様にインタコネクト LAN IP アドレス (バックアップ) (10.0.0.1) を入力し、[次へ] をクリックします。
6. [追加] をクリックし、[IP アドレス] ボックスにパブリック LAN の IP アドレス (10.0.0.1) を入力します。[OK] をクリックします。
7. 入力した IP アドレスが [パブリック LAN I/F 一覧] に設定されているのを確認し、[次へ] をクリックします。
8. RS-232C を使用したハートビートを行う場合は、[追加] をクリックし、[デバイス名] ボックスに COM ハートビート デバイス名を入力します (通常は、デフォルトのデバイス名をそのまま使用してください)。[OK] をクリックします。
9. 入力した デバイス名が [COM I/F 一覧] に設定されます。[次へ] をクリックします。
10. クラスタ環境が共有ディスク使用時の場合は、[追加] をクリックし、[raw デバイス] ボックスに raw デバイス名 (/dev/rdisk/c3t0d0s0) を入力します。[OK] をクリックします。
11. 入力したデバイスが [ディスク I/F 一覧] に設定されます。[次へ] をクリックします。

12. [Ping I/F 一覧] が表示されます。何も設定せずに、[完了] をクリックします。

[サーバの定義一覧] は以下ようになります。1 台目に定義したサーバはデフォルトでマスタサーバになります。



## 1-3 サーバ (2 台目) を追加する

1 台目のサーバの情報に対応するように、2 台目のサーバの情報を入力します。

1. [サーバの定義一覧] で [追加] をクリックします。
2. [サーバの定義] ダイアログ ボックスが開きます。[名前] ボックスにサーバ名 (server2) を入力し、[次へ] をクリックします。

---

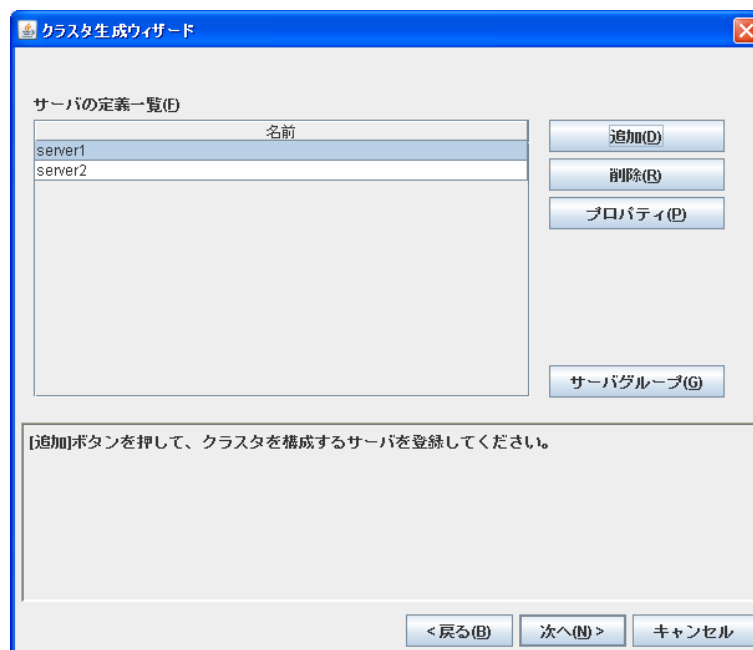
**注:** サーバ名は、実際のサーバのホスト名です。また、大文字と小文字は区別されます。

---

3. 2 台目以降のサーバの定義では、マスタサーバの I/F と同じ数の I/F が表示されます。IP アドレスはデフォルトでは空白です。他のサーバに登録した I/F 番号に対応させて、IP アドレスを設定します。  
[編集] をクリックし、[IP アドレス] ボックスにインタコネクト LAN IP アドレス (専用) (192.168.0.2) を入力します。[OK] をクリックします。
4. 入力した IP アドレスが [インタコネクト LAN I/F 一覧] に設定されます。  
同様に、[I/F 番号] の [2] を選択して [編集] をクリックし、インタコネクト LAN IP アドレス (バックアップ) (10.0.0.2) を入力します。[次へ] をクリックします。
5. [編集] をクリックし、[IP アドレス] ボックスにパブリック LAN の IP アドレス (10.0.0.2) を入力します。[OK] をクリックします。
6. 入力した IP アドレスが [パブリック LAN I/F 一覧] に設定されているのを確認し、[次へ] をクリックします。
7. RS-232C を使用したハートビートを行う場合は、[COM I/F 一覧] にデバイス名が表示されます。マスタサーバの I/F と同じ数の I/F が表示されます。デフォルトでは、マスタサーバの COM ハートビート デバイス名が設定されています。通常は、設定を変更せずに [次へ] をクリックします。
8. クラスタ環境が共有ディスク使用時の場合は、マスタサーバの I/F と同じ数の I/F が表示されます。デフォルトでは、マスタサーバのディスク デバイス名が設定されています。設定を変更せずに [次へ] をクリックします。
9. [Ping I/F 一覧] が表示されます。何も設定せずに、[完了] をクリックします。



[サーバの定義一覧] は以下ようになります。



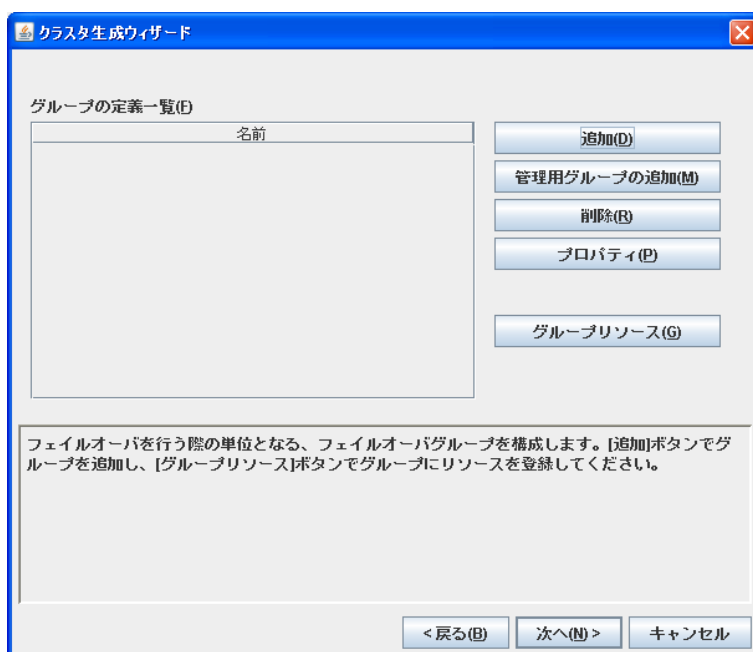
## 2 フェイルオーバーグループの追加

クラスタに、フェイルオーバーグループ(以下「グループ」と省略する場合あり)を追加します。まず、管理用のフェイルオーバーグループを作成し、その後に業務用のアプリケーションを実行するフェイルオーバーグループを追加します。

### 2-1 管理用のフェイルオーバーグループを追加する

このグループには、クラスタを構成する複数のサーバに、共通の IP アドレスを 1 つ指定します。これは、WebManager へアクセスする際に管理クライアントが使用する IP アドレスです。これにより、管理用クライアントからは、常にアクティブなサーバにアクセスすることができます。

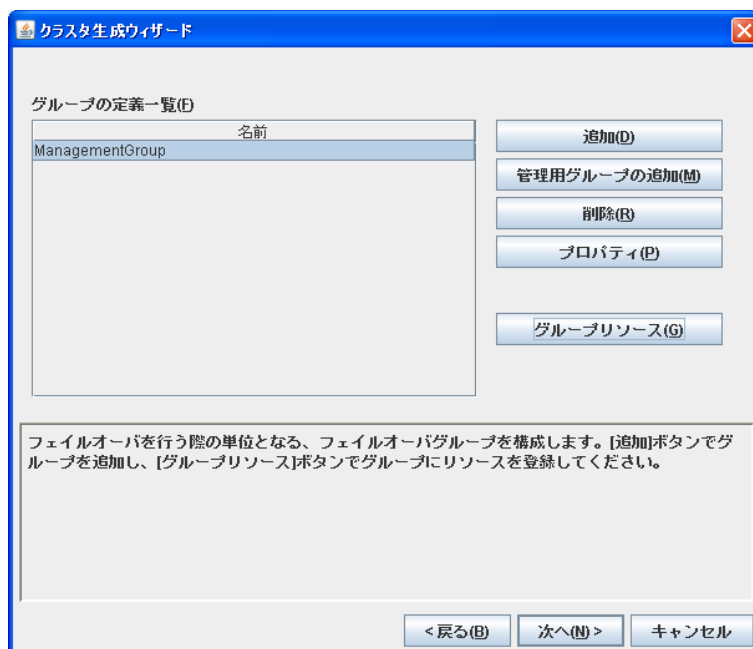
1. [サーバの定義一覧] で、[次へ] をクリックします。
2. [グループの定義一覧] が表示されます。



3. [管理用グループの追加] をクリックします。[グループの定義一覧] に [ManagementGroup] が追加され表示されます。
4. [ManagementGroup] を選択した状態で[グループリソース]をクリックします。[グループリソース定義の一覧] が表示されます。[追加]をクリックします。
5. [リソースの定義] ダイアログ ボックスが開きます。[タイプ] ボックスでグループ リソースのタイプ (floating ip resource) を選択します。[名前] ボックスにはデフォルトの名前 (ManagementIP) が入力されています。[次へ] をクリックします。
6. [IP アドレス] ボックスにフローティング IP アドレス (10.0.0.11) を入力し [次へ] をクリックします。
7. [活性異常検出時の復旧動作]、[非活性異常時の復旧動作] が表示されます。[次へ] をクリックします。
8. 依存関係設定のページが表示されます。何も指定せず [完了] をクリックします。

9. [グループリソース定義の一覧] が表示されます。ManagementIP が登録されていることを確認し、[閉じる]をクリックします。

管理用のグループが追加されました。生成ウィザード画面は以下のようになります。

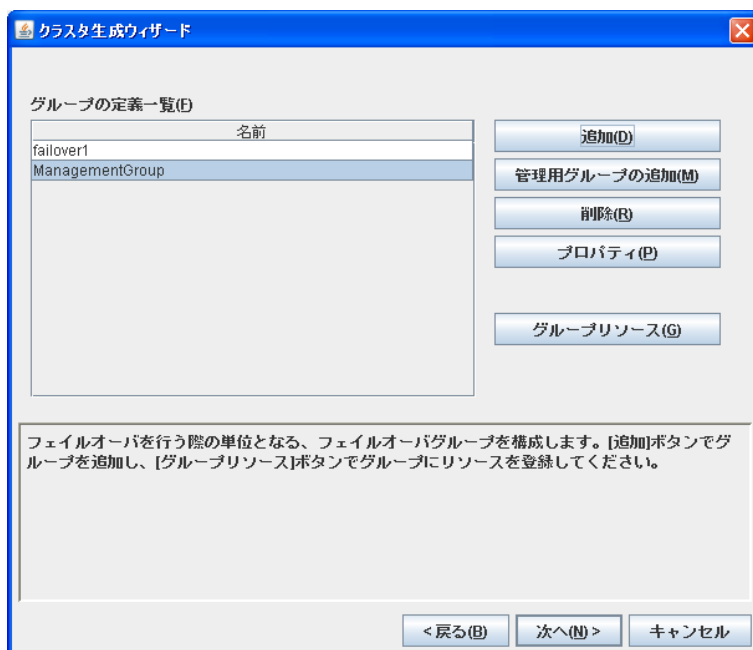


## 2-2 グループ (業務用) を追加する

次に、障害発生時にフェイルオーバーを行う単位となる、グループの設定を行います。

1. [グループの定義一覧] で [追加] をクリックします。
2. [グループの定義] ダイアログ ボックスが開きます。  
[名前] ボックスにグループ名 (failover1) を入力し、[次へ] をクリックします。
3. [全てのサーバでフェイルオーバー可能]がチェックされていることを確認し、[完了]をクリックします。

フェイルオーバー グループが追加されました。[グループの定義一覧]は以下のようにになります。



## 2-3 グループ リソース (フローティング IP アドレス) を追加する

ステップ 2-2 で作成したフェイルオーバー グループに、グループの構成要素であるグループリソースを追加します。

1. [グループの定義一覧] で、[failover1] を選択した状態で [グループリソース] をクリックします。
2. [グループリソースの定義一覧] が表示されます。[追加] をクリックします。
3. [リソースの定義] ダイアログ ボックスが開きます。[タイプ] ボックスでグループ リソースのタイプ (floating ip resource) を選択し、[名前] ボックスにグループリソース名 (fip1) を入力します。[次へ] をクリックします。
4. [IP アドレス] ボックスに IP アドレス (10.0.0.12) を入力し [次へ] をクリックします。
5. [活性異常検出時の復旧動作]、[非活性異常時の復旧動作] が表示されます。[次へ] をクリックします。
6. 依存関係設定のページが表示されます。何も指定せず [完了] をクリックします。

## 2-4 グループ リソース (ボリューム マネージャ リソース) を追加する

ZFS ストレージプールをグループリソースとして追加します。

1. [グループリソースの定義一覧] で [追加] をクリックします。
2. [リソースの定義] ダイアログ ボックスが開きます。[タイプ] ボックスでグループ リソースのタイプ (volume manager resource) を選択し、[名前] ボックスにグループリソース名 (volmgr1) を入力します。[次へ] をクリックします。
3. [ボリュームマネージャ] ボックスでボリュームマネージャ (zfspool) を選択し、プール名 (tank) を入力します。[次へ] をクリックします。
4. [活性異常検出時の復旧動作]、[非活性異常時の復旧動作] が表示されます。[次へ] をクリックします。
5. 依存関係設定のページが表示されます。何も指定せず [完了] をクリックします。

## 2-5 グループ リソース (ディスク リソース) を追加する

ZFS データセットをグループリソースとして追加します。

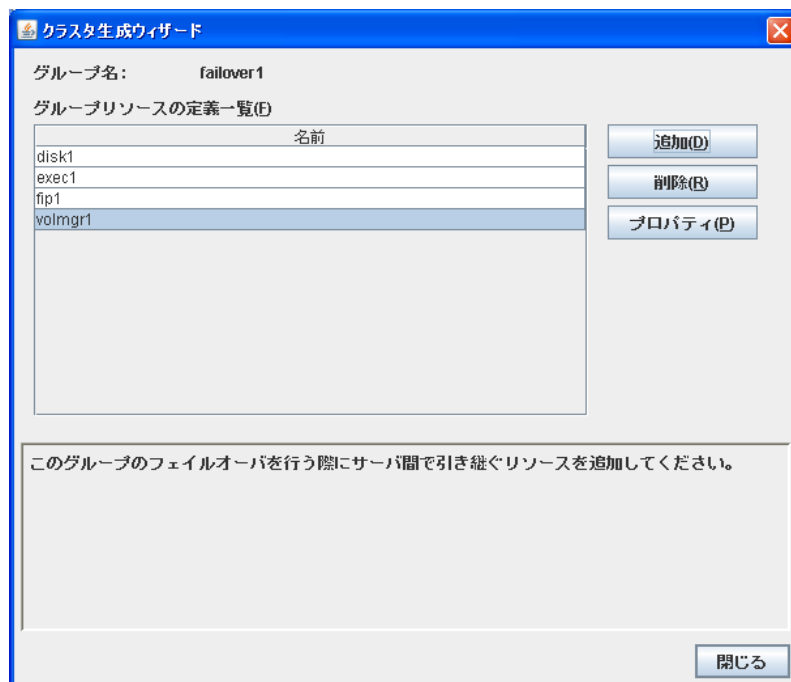
1. [グループリソースの定義一覧] で [追加] をクリックします。
2. [リソースの定義] ダイアログ ボックスが開きます。[タイプ] ボックスでグループ リソースのタイプ (disk resource) を選択し、[名前] ボックスにグループリソース名 (disk1) を入力します。[次へ] をクリックします。
3. デバイス名 (/dev/dsk/c3t0d0s1)、マウントポイント (/mnt/disk1) をそれぞれのボックスに入力し、[ファイルシステム] ボックスでファイルシステム (ufs)、[ディスクのタイプ] ボックスでディスクのタイプ (disk) を選択します。[次へ] をクリックします。
4. [活性異常検出時の復旧動作]、[非活性異常時の復旧動作] が表示されます。[次へ] をクリックします。
5. 依存関係設定のページが表示されます。何も指定せず [完了] をクリックします。

## 2-6 グループ リソース (EXEC リソース) を追加する

スクリプトによってアプリケーションの起動/終了を行う、EXEC リソースを追加します。

1. [グループリソースの定義一覧] で [追加] をクリックします。
2. [リソースの定義] ダイアログ ボックスが開きます。[タイプ] ボックスでグループ リソースのタイプ (execute resource) を選択し、[名前] ボックスにグループリソース名 (exec1) を入力します。[次へ] をクリックします。
3. [この製品で作成したスクリプト] をチェックします。  
ユーザはこのスクリプトを編集して、業務アプリケーションの起動および停止手順を記述します。すでに CLUSTERPRO で使用するアプリケーションが決定している場合は、ここでスクリプトを編集します。  
[次へ] をクリックします。
4. [活性異常検出時の復旧動作]、[非活性異常時の復旧動作] が表示されます。[次へ] をクリックします。
5. 依存関係設定のページが表示されます。何も指定せず [完了] をクリックします。

クラスタ環境が共有ディスク使用時の場合は、failover1 の[グループリソースの定義一覧]は以下ようになります。



6. [閉じる] をクリックします。

## 3 モニタリソースの追加

指定した対象を監視するモニタリソースをクラスタに追加します。

### 3-1 モニタ リソース (volmgrw monitor) を追加する

ZFS ストレージプールを監視するモニタ リソースを追加します。

1. [グループの定義一覧] で、[次へ] をクリックします。
2. [モニタリソースの定義一覧] が表示されます。[追加] をクリックします。
3. [モニタリソースの定義] ダイアログ ボックスが開きます。1 つ目のモニタ リソースはクラスタ名を定義したときにデフォルトで作成されています。  
[タイプ] ボックスでモニタ リソースのタイプ (volume manager monitor) を選択し、[名前] ボックスにモニタ リソース名 (volmgrw1) を入力します。[次へ] をクリックします。
4. [ボリュームマネージャ] ボックスでボリュームマネージャ (zfspool) を選択します。プール名 (tank) を入力します。[次へ] をクリックします。
5. 監視設定を入力します。対象リソースの [参照] をクリックします。
6. 表示されるツリー ビューで [volmgr1] をクリックし、[OK] をクリックします。[対象リソース] に [volmgr1] が設定されます。
7. 回復対象を設定します。[参照] をクリックします。
8. 表示されるツリー ビューで [cluster] をクリックし、[OK] をクリックします。[回復対象] に [cluster] が設定されます。
9. [最終動作] ボックスで [クラスタデーモン停止と OS シャットダウン] を選択し、[完了] をクリックします。

### 3-2 モニタ リソース (管理グループ用の NIC Link Up/Down monitor) を追加する

NIC を監視するモニタリソースを追加します。NIC Link Up/Down 監視は、フェイルオーバーグループごとに作成する必要があります。この例では、管理用グループと業務用グループの 2 つのグループがあるため、それぞれに 1 つ NIC Link Up/Down monitor を作成します。

1. [モニタリソースの定義一覧] 画面で [追加] をクリックします。
2. [モニタリソースの定義] ダイアログ ボックスが開きます。[タイプ] ボックスでモニタ リソースのタイプ (NIC Link Up/Down monitor) を選択し、[名前] ボックスにモニタ リソース名 (miiw1) を入力します。[次へ] をクリックします。
3. [監視対象] ボックスに監視対象の NIC (e1000g0) を入力し [次へ] をクリックします。
4. 監視設定を入力します。ここではデフォルト値のまま変更せず、[次へ] をクリックします。
5. 回復対象を設定します。[参照] をクリックします。
6. 表示されるツリー ビューで [ManagementGroup] を選択し、[OK] をクリックします。[回復対象] に [ManagementGroup] が設定されます。

7. [再活性しきい値] ボックスに [0] を設定し、[フェイルオーバーしきい値] ボックスに [1] を設定します。[完了] をクリックします。

### 3-3 モニタ リソース (業務グループ用の NIC Link Up/Down monitor) を追加する

1. [モニタリソースの定義一覧] 画面で [追加] をクリックします。
2. [モニタリソースの定義] ダイアログ ボックスが開きます。[タイプ] ボックスでモニタ リソースのタイプ (NIC Link Up/Down monitor) を選択し、[名前] ボックスにモニタ リソース名 (miiw2) を入力します。[次へ] をクリックします。
3. [監視対象] ボックスに監視対象の NIC (e1000g0) を入力し [次へ] をクリックします。
4. 監視設定を入力します。ここではデフォルト値のまま変更せず、[次へ] をクリックします。
5. 回復対象を設定します。[参照] をクリックします。
6. 表示されるツリー ビューで [failover1] をクリックし、[OK] をクリックします。[回復対象] に [failover1] が設定されます。
7. [再活性しきい値] ボックスに [0] を設定し、[フェイルオーバーしきい値] ボックスに [1] を設定します。[完了] をクリックします。

[モニタリソースの定義一覧]は以下ようになります。



8. [完了] をクリックします。

以上でクラスタ構成情報の作成は終了です。90ページの、「クラスタを生成する」へ進んでください。



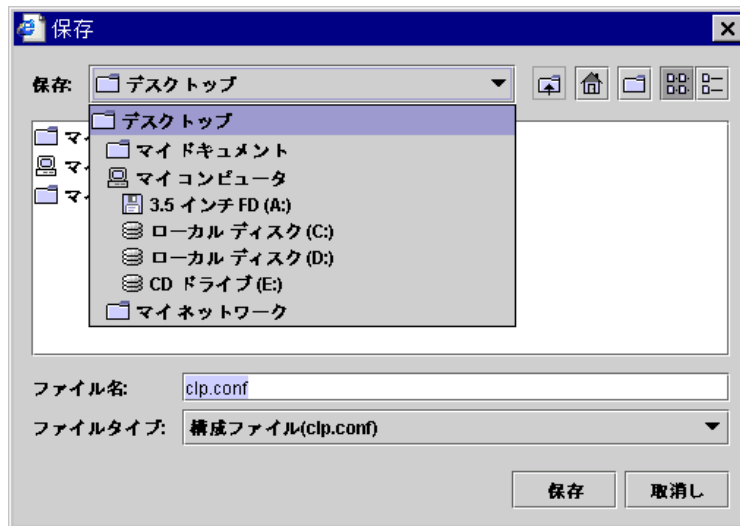
## クラスタ構成情報を保存する

クラスタ構成情報は、ファイル システム上に保存する方法と、FD 等のメディアに保存する方法があります。WebManager 経由で Builder を起動している場合、保存したクラスタ情報を CLUSTERPRO Server をインストールしたサーバマシンに WebManager 経由で反映させることができます。

### クラスタ構成情報をファイル システムへ保存する (Windows)

Windows マシン使用時に、ファイル システムにクラスタ構成情報を保存するには、以下の手順に従ってください。

1. Builder の [ファイル] メニューから [情報ファイルの保存] を選択します。
2. 以下のダイアログ ボックスで保存先を選択し、[保存] をクリックします。



3. 任意のディレクトリを選択または作成し、[保存] をクリックします。後ほどクラスタ生成コマンドを実行する際に、このディレクトリを指定します。

**注:** 保存されるのはファイル 2 点 (clp.conf、clp.conf.rep) とディレクトリ 1 点 (scripts) です。これらのファイルとディレクトリがすべて揃っていない場合はクラスタ生成コマンドの実行が不成功に終わりますので、移動する場合はかならずこの 3 点をセットとして取り扱ってください。なお、新規作成した構成情報を変更した場合は、上記 3 点に加えて clp.conf.bak が作成されます。

4. ファイルシステム内を参照し、ファイル 2 点 (clp.conf、clp.conf.rep) とディレクトリ 1 点 (scripts) が保存先のディレクトリ直下に作成されていることを確認します。

## クラスタを生成する

Builder でクラスタ構成情報を作成したら、クラスタを構成するサーバに構成情報を反映させクラスタシステムを生成します。

### クラスタを生成するには

Builder でクラスタ構成情報の作成が終了したら、以下の手順でクラスタを生成します。

1. Builder の[ファイル] メニューから、[情報ファイルのアップロード] をクリックします。  
アップロードに成功すると、以下のメッセージが表示されます。

「アップロードは成功しました。クラスタを開始するには「インストールガイド クラスタを生成する」を参照して操作してください。

アップロードに失敗した場合は、表示されるメッセージに従って操作を行ってください。

2. Builder を終了します。
3. 以下の手順を実行してください。
  - (1) Webマネージャのサービスメニューから [マネージャ再起動] を実行します。
  - (2) Webマネージャのサービスメニューから [クラスタ開始] を実行します。クラスタが開始され、クラスタの状態がWebManagerIに表示されます。

## 第 6 章 クラスタシステムを確認する

本章では、作成したクラスタシステムが正常に起動するかどうかを確認します。

本章で説明する項目は以下のとおりです。

- WebManagerIによる動作確認..... 92
- コマンドによるクラスタの動作確認 ..... 94

## WebManager による動作確認

設定後のクラスタシステムの確認には、WebManager を使用して行う方法と、コマンドラインを使用して行う方法があります。本トピックでは、WebManager を使用してクラスタシステムの確認を行う方法について説明します。WebManager は、CLUSTERPRO Server のインストール時点ですでにインストールされています。新たにインストールを行う必要はありません。ここでは、まず WebManager の概要を説明し、その後、WebManager にアクセスし、クラスタの状態を確認する方法について説明します。

---

**関連情報:** WebManager の動作環境については、『スタートアップ ガイド』の「第 3 章 CLUSTERPRO の動作環境」を参照してください。

---

クラスタを生成し、WebManager を接続後、以下の手順で動作を確認します。

---

**関連情報:** WebManager の操作方法については『リファレンス ガイド』の「第 1 章 WebManager の機能」を参照してください。また、動作確認で異常がある場合は『リファレンス ガイド』の「第 11 章 トラブルシューティング」を参照して障害を取り除いてください。

---

### 1. ハートビート リソース

WebManager 上で各サーバのステータスが ONLINE であることを確認します。  
各サーバのハートビート リソースのステータスが NORMAL であることを確認します。

### 2. モニタ リソース

WebManager 上で各モニタ リソースのステータスが NORMAL であることを確認します。

### 3. グループ起動

グループを起動します。  
WebManager 上でグループのステータスが ONLINE であることを確認します。

### 4. ボリュームマネージャ リソース

ボリュームマネージャリソースを持つグループが起動しているサーバで、プールがインポートされていることを確認します。

### 5. ディスク リソース

ディスクリソースを持つグループが起動しているサーバで、ディスクのマウント ポイントにアクセスできることを確認します。

### 6. フローティング IP リソース

フローティング IP リソースを持つグループが起動している状態で、フローティング IP アドレスに対して ping コマンドが成功することを確認します。

### 7. EXEC リソース

EXEC リソースを持つグループが起動しているサーバで、アプリケーションが動作していることを確認します。

### 8. グループ停止

グループを停止します。  
WebManager 上でグループのステータスが OFFLINE であることを確認します。

### 9. グループ移動

グループを他のサーバに移動します。

WebManager 上でグループのステータスが ONLINE であることを確認します。

フェイルオーバー ポリシに含まれる全サーバに対してグループを移動してステータスが ONLINE になることを確認します。

#### 10. フェイルオーバー

グループが起動しているサーバをシャットダウンします。

ハートビート タイムアウト経過後、グループがフェイルオーバーされることを確認します。また、WebManager 上でフェイルオーバー先のサーバでグループのステータスが ONLINE になることも確認します。

#### 11. フェイルバック (設定している場合)

自動フェイルバックを設定している場合は、10 フェイルオーバーの確認でシャットダウンしたサーバを起動します。サーバ起動後、グループがフェイルバックすることを確認します。また、WebManager 上でフェイルバック先のサーバでグループのステータスが ONLINE になることも確認します。

#### 12. クラスタ シャットダウン

クラスタをシャットダウンします。クラスタ内の全サーバが正常にシャットダウンされることを確認します。

## コマンドによるクラスタの動作確認

クラスタを生成後、コマンドラインを使用してクラスタを構成するサーバ上からクラスタの状態を確認するには、以下の手順で動作を確認します。

---

**関連情報:** コマンドの操作方法については『リファレンス ガイド』の「第 4 章 CLUSTERPRO コマンド リファレンス」を参照してください。また、動作確認で異常がある場合は『リファレンス ガイド』の「第 11 章 トラブルシューティング」を参照して障害を取り、除いてください。

---

### 1. ハートビート リソース

clpstat コマンドを使用して、各サーバのステータスが ONLINE であることを確認します。  
各サーバのハートビート リソースのステータスが NORMAL であることを確認します。

### 2. モニタ リソース

clpstat コマンドを使用して、各モニタ リソースのステータスが NORMAL であることを確認します。

### 3. グループ起動

clpgrp コマンドを使用して、グループを起動します。  
clpstat コマンドを使用して、グループのステータスが ONLINE であることを確認します。

### 4. グループ停止

clpgrp コマンドを使用して、グループを停止します。  
clpstat コマンドを使用して、グループのステータスが OFFLINE であることを確認します。

### 5. ボリュームマネージャ リソース

ボリュームマネージャリソースを持つグループが起動しているサーバで、プールがインポートされていることを確認します。

### 6. ディスク リソース

ディスク リソースを持つグループが起動しているサーバで、ディスクのマウント ポイントにアクセスできることを確認します。

### 7. フローティング IP リソース

フローティング IP リソースを持つグループが起動している状態で、フローティング IP アドレスに対して ping コマンドが成功することを確認します。

### 8. EXEC リソース

EXEC リソースを持つグループが起動しているサーバで、アプリケーションが動作していることを確認します。

### 9. グループ移動

clpgrp コマンドを使用して、グループを他のサーバに移動します。  
clpstat コマンドを使用して、グループのステータスが ONLINE であることを確認します。  
フェイルオーバー ポリシに含まれる全サーバに対してグループを移動してステータスが ONLINE になることを確認します。

### 10. フェイルオーバー

グループが起動しているサーバをシャットダウンします。  
ハートビート タイムアウト経過後、clpstat コマンドを使用して、グループがフェイルオー

バされることを確認します。また、clpstat コマンドを使用して、フェイルオーバー先のサーバでグループのステータスが ONLINE になることも確認します。

#### 11. フェイルバック

自動フェイルバックを設定している場合は、10 フェイルオーバーの確認でシャットダウンしたサーバを起動します。サーバ起動後、clpstat コマンドを使用して、グループがフェイルバックすることを確認します。また、clpstat コマンドを使用して、フェイルバック先のサーバでグループのステータスが ONLINE になることも確認します。

#### 12. クラスタ シャットダウン

clpstdn コマンドを使用して、クラスタをシャットダウンします。クラスタ内の全サーバが正常にシャットダウンされることを確認します。





## 第 7 章 クラスタ構成情報を変更する

本章では、作成したクラスタシステムが正常に起動するかどうかを確認します。

本章で説明する項目は以下のとおりです。

- クラスタ構成情報を変更する ..... 98
- クラスタ構成情報を反映する ..... 102
- オンラインのBuilderを使用する場合 ..... 103
- オフラインのBuilderを使用する場合 ..... 105
- オフラインのBuilder を使用する場合の注意事項 ..... 109

## クラスタ構成情報を変更する

CLUSTERPRO 本体の構成やパラメータを変更する場合、必ずクラスタ構成情報のバックアップを作成する必要があります。クラスタ構成情報のバックアップには、clpcfctrl コマンドを使用します。詳細は『リファレンスガイド』の「第 4 章 CLUSTERPRO コマンドリファレンス」を参照してください。

続いて、クラスタ構成情報の内容を、CLUSTERPRO Builder で変更します。CLUSTERPRO Builder の設定については、『リファレンスガイド』の「第 3 章 Builder の機能」を参照してください。

クラスタ作成後、構成情報を変更する際の手順と注意事項について説明します。

### サーバを追加する

クラスタを構成するサーバを追加します。

1. ツリー ビューの [Servers] をクリックし、[編集] メニューの [追加] をクリックします。
2. [サーバの定義] ダイアログ ボックスが開きます。サーバ情報を入力します。[名前] ボックスにサーバ名を入力し、[次へ] をクリックします。

---

**注:** サーバ名は、実際のサーバのホスト名です。また、大文字と小文字は区別されます。

---

3. インタコネクト LAN の設定を行います。[追加]または[編集] をクリックし、[IP アドレス] ボックスに インタコネクト LAN IP アドレスを入力します。[OK] をクリックします。
4. 入力した IP アドレスが [インタコネクト LAN I/F 一覧] に表示されます。使用する全てのインタコネクト LAN の IP アドレスを追加します。全て追加したら[次へ] をクリックします。
5. パブリック LAN の設定を行います。[追加]または[編集] をクリックし、[IP アドレス] ボックスにパブリック LAN の IP アドレスを入力します。[OK] をクリックします。
6. 入力した IP アドレスが [パブリック LAN I/F 一覧] に表示されます。使用する全てのパブリック LAN の IP アドレスを追加します。全て追加したら[次へ] をクリックします。
7. COMハートビートの設定を行います。RS-232C を使用したハートビートを行う場合は、[追加]または[編集] をクリックし、[デバイス名] ボックスに COM ハートビート デバイス名を入力します(通常は、デフォルトのデバイス名をそのまま使用してください)。[OK] をクリックします。
8. 入力した デバイス名が [COM I/F 一覧] に設定されます。[次へ] をクリックします。
9. クラスタ環境がディスクリソースを使用している場合は、ディスクハートビートの設定を行います。[追加]または[編集] をクリックし、[raw デバイス名] ボックスに raw デバイス名を入力します。[OK] をクリックします。
10. 入力したデバイスが [ディスク I/F 一覧] に設定されます。[次へ] をクリックします。
11. Ping ネットワークパーティション解決リソースの設定を行います。[追加]または[編集] をクリックします。グループ一覧の編集したいグループ No を選択した状態で、IP アドレス一覧の [追加]または[編集] ボタンをクリックし、[IP アドレス] ボックスに IP アドレスを入力します。[OK] をクリックします。
12. 入力した デバイス名が [Ping I/F 一覧] に設定されます。[次へ] をクリックします。
13. [完了]をクリックします。

## グループを追加する

フェイルオーバーを行う単位となる、グループを追加します。

1. ツリー ビューの [Groups] をクリックし、[編集] メニューの [追加] をクリックします。
2. [グループの定義] ダイアログ ボックスが開きます。  
[名前] ボックスにグループ名を入力し、[次へ] をクリックします。
3. [起動サーバ]が表示されます。設定を行い、[完了]をクリックします。

## グループリソースを追加する

グループリソースを追加します。ここでは例として、フローティング IP リソースを追加します。

1. ツリー ビューで追加するリソースが所属するグループをクリックし、[編集] メニューから [追加] をクリックします。
2. [リソースの定義] ダイアログ ボックスが開きます。[タイプ] ボックスでグループ リソースのタイプ (floating ip resource) を選択し、[名前] ボックスにグループリソース名を入力します。[次へ] をクリックします。
3. [IP アドレス] ボックスに IP アドレスを入力し [次へ] をクリックします。
4. [活性異常検出時の復旧動作]、[非活性異常時の復旧動作] が表示されます。設定を行い、[次へ] をクリックします。
5. 依存関係設定のページが表示されます。設定を行い、[完了] をクリックします。

## モニタリソースを追加する

モニタリソースを追加します。ここでは例として、IP モニタリソースを追加します。

1. ツリー ビューの [Monitors] をクリックし、[編集] メニューの [追加] をクリックします。
2. [監視リソースの定義] ダイアログ ボックスが開きます。[タイプ] ボックスでモニタ リソースのタイプ (ip monitor) を選択し、[名前] ボックスにモニタ リソース名を入力します。[次へ] をクリックします。
3. [追加] をクリックします。  
[IP アドレス] ボックスに監視 IP アドレスを入力し [OK] をクリックします。
4. 入力した IP アドレスが [IP アドレス一覧] に設定されます。[次へ] をクリックします。
5. 監視設定が表示されます。設定を行い、[次へ] をクリックします。
6. 回復対象が表示されます。設定を行い、[完了] をクリックします。

## CLUSTERPRO Builder(オンライン版)を使用してクラスタ構成情報を変更する

1. ブラウザを使用して、CLUSTERPRO WebManager を起動します。  
`http://CLUSTERPRO Server をインストールしたサーバの実 IP アドレス:ポート番号(既定値 29003)/`
2. WebManager のタイトルバーで、[設定] をクリックして Builder を起動します。
3. 現在のクラスタ構成情報が表示されるので、構成情報を変更します。
4. 変更した構成情報をアップロードします。  
その際、変更した情報によってはクラスタのサスペンドや停止、クラスタシャットダウンによる再起動などが必要になります。このような場合はアップロードが一旦キャンセルされ、必要な操作が表示されますので、表示されたメッセージにしたがって操作を行い、再度アップロードを実施してください。

## CLUSTERPRO Builder(オフライン版)を使用してクラスタ構成情報を変更する

1. Web ブラウザを使用して、CLUSTERPRO Builder を起動します。  
(インストールパス)/clptrek.htm
2. 保存しておいたクラスタ構成情報を開きます。
3. クラスタ構成情報が表示されるので、構成情報を変更します。
4. 変更した構成情報を保存します。
5. CLUSTERPRO がインストールされているサーバでコマンドを利用して保存した構成情報をアップロードします。

```
clpcfctrl --push -w -x <構成情報のあるディレクトリパス>
```

その際、変更した情報によってはクラスタのサスペンドや停止、クラスタシャットダウンによる再起動などが必要になります。このような場合はアップロードが一旦キャンセルされ、必要な操作が表示されますので、表示されたメッセージにしたがって操作を行い、再度アップロードを実施してください。

## クラスタ構成情報を反映する

クラスタ構成情報の内容を、CLUSTERPRO 本体の環境に反映します。反映は、変更した内容によって反映方法が異なります。変更したパラメータと反映方法に関する詳細は『リファレンスガイド』の「第 3 章 Builder の機能」を参照してください。

反映方法によって、CLUSTERPRO 本体の動作に影響する場合があります。詳細は以下の表を参照してください。

反映方法	影響
アップロードのみ	業務アプリケーションやCLUSTERPRO 本体の動作に影響はありません。
アップロードしてからWebManagerを再起動	ハートビートリソースやグループリソース、モニタリソースは停止しません。
クラスタをサスペンドしてからアップロード	CLUSTERPRO 本体の一部の動作が停止します。 CLUSTERPROデーモンがサスペンドしている期間は、ハートビートリソースとモニタリソースが停止します。グループリソースは停止しませんので、業務アプリケーションは継続動作します。
クラスタを停止してからアップロード	CLUSTERPRO 本体の全ての動作が停止します。グループも停止されますので、アップロードしてクラスタを開始し、グループが起動するまで業務アプリケーションが停止します。
アップロードしてからクラスタシャットダウン・再起動	クラスタが再起動してグループが起動するまで業務アプリケーションが停止します。

**注:** 反映方法として CLUSTERPRO デーモンのサスペンド、または CLUSTERPRO デーモンの停止が必要な場合には、クラスタ構成情報を反映させる前に、サスペンドまたは停止が完了したことを確認する必要があります。

WebManager のアラートビューで、「モジュールタイプ:pm、イベント分類:情報、イベント ID:2」のメッセージが出力されたことを確認してください。メッセージの詳細については『リファレンスガイド』の「第 12 章 エラーメッセージ一覧」を参照してください。

WebManager が使用できない場合は、syslog に「モジュールタイプ:pm、イベント分類:情報、イベント ID:2」のメッセージが出力されることを確認してください。

上記メッセージの確認後、クラスタ構成情報を CLUSTERPRO 本体の環境に反映してください。

# オンラインの Builder を使用する場合

## アップロードのみ

1. CLUSTERPRO Builder を起動し、クラスタ構成情報を変更します。
2. CLUSTERPRO Builder でクラスタ構成情報をアップロードします。
3. 以下のメッセージが表示されれば配信は正常に終了しています。  
*アップロードに成功しました*

## アップロードしてから WebManager を再起動

CLUSTERPRO WebManager の再起動については、「リファレンスガイド」の「第 1 章 WebManager の機能」を参照してください。

1. CLUSTERPRO Builder を起動し、クラスタ構成情報を変更します。
2. CLUSTERPRO Builder でクラスタ構成情報をアップロードします。
3. 以下のメッセージが表示されれば配信は正常に終了しています。  
*アップロードに成功しました。*  
*変更を反映するためにマネージャ再起動を実行してください。*
4. WebManager を再起動します。

## クラスタをサスペンドしてアップロード

サーバ追加、削除の構成変更をおこなう場合などに、クラスタをサスペンドする方法について説明します。

1. CLUSTERPRO Builder を起動し、クラスタ構成情報を変更します。
2. WebManager の[サービス]ボタンから[クラスタサスペンド]を実行します。
3. CLUSTERPRO Builder でクラスタ構成情報をアップロードします。
4. 以下のメッセージが表示されれば配信は正常に終了しています。  
*アップロードに成功しました*
5. WebManager の[サービス]ボタンから[クラスタリジューム]を実行します。

## クラスタを停止してからアップロード

1. CLUSTERPRO Builder を起動し、クラスタ構成情報を変更します。
2. WebManager の[サービス]ボタンから[クラスタ停止]を実行します。
3. CLUSTERPRO Builder でクラスタ構成情報をアップロードします。
4. 以下のメッセージが表示されれば配信は正常に終了しています。  
*アップロードに成功しました*
5. WebManager の[サービス]ボタンから[クラスタ開始]を実行します。

## アップロードしてからクラスタシャットダウン・再起動

1. CLUSTERPRO Builder を起動し、クラスタ構成情報を変更します。
2. WebManager の[サービス]ボタンから[クラスタ停止]を実行します。
3. CLUSTERPRO Builder でクラスタ構成情報をアップロードします。
4. 以下のメッセージが表示されれば配信は正常に終了しています。  
アップロードに成功しました  
変更を反映するためにクラスタのシャットダウン・リブートを実行してください。
5. 全サーバを再起動します。



# オフラインの Builder を使用する場合

## アップロードのみ

1. Builder でマスタサーバに指定したサーバに構成情報を用意します。
2. 構成情報を、クラスタを構成するサーバに配信します。
  - A. Windows で構成情報を作成した場合、-w オプションをつけてコマンドを実行します。

```
clpcfctrl --push -w -x <構成情報のあるディレクトリパス>
```

3. 以下のメッセージが表示されれば配信は正常に終了しています。

```
The upload is completed successfully.(cfmgr:0)  
Command succeeded.(code:0)
```

clpcfctrl 実行時のトラブルシューティングについては『リファレンスガイド』の「第 4 章 CLUSTERPRO コマンドリファレンス」を参照してください。

## アップロードしてから WebManager を再起動

CLUSTERPRO WebManager の停止・再開については、『リファレンスガイド』の「第 1 章 WebManager の機能」を参照してください。

1. Builder でマスタサーバに指定したサーバに構成情報を用意します。
2. 構成情報を、クラスタを構成するサーバに配信します。
  - A. Windows で構成情報を作成した場合、-w オプションをつけてコマンドを実行します。

```
clpcfctrl --push -w -x <構成情報のあるディレクトリパス>
```

3. 以下のメッセージが表示されれば配信は正常に終了しています。

```
The upload is completed successfully.(cfmgr:0)
To apply the changes you made, restart the WebManager.
Command succeeded.(code:0)
```

clpcfctrl 実行時のトラブルシューティングについては『リファレンスガイド』の「第 4 章 CLUSTERPRO コマンドリファレンス」を参照してください。

4. WebManager を再起動します。

## クラスタをサスペンドしてアップロード

サーバ追加、削除の構成変更をおこなう場合などに、CLUSTER デーモンをサスペンドする方法について説明します。

1. clpcl --suspend を実行して、CLUSTERPRO デーモンをサスペンドします。
2. Builder でマスタサーバに指定したサーバに構成情報を用意します。
3. 構成情報をサーバに配信します。

A. Windows で構成情報を作成した場合、-w オプションをつけてコマンドを実行します。

```
clpcfctrl --push -w -x <構成情報のあるディレクトリパス>
```

4. リターンキー入力後、以下のメッセージが表示されれば構成情報の配信は正常に終了しています。

```
The upload is completed successfully.(cfmgr:0)
Command succeeded.(code:0)
```

clpcfctrl 実行時のトラブルシューティングについては『リファレンスガイド』の「第 4 章 CLUSTERPRO コマンドリファレンス」を参照してください。

5. clpcl --resume を実行して、CLUSTERPRO デーモンをリジュームします。

## クラスタを停止してからアップロード

1. `clpcl -t -a` を実行して、CLUSTERPRO デーモンを停止します。
2. Builder でマスタサーバに指定したサーバに構成情報を用意します。
3. 構成情報をサーバに配信します。
  - A. Windows で構成情報を作成した場合、`-w` オプションをつけてコマンドを実行します。

```
clpcfctrl --push -w -x <構成情報のあるディレクトリパス>
```

以下のメッセージが表示されれば構成情報の配信は正常に終了しています。

```
The upload is completed successfully.(cfmgr:0)
Command succeeded.(code:0)
```

`clpcfctrl` 実行時のトラブルシューティングについては『リファレンスガイド』の「第 4 章 CLUSTERPRO コマンドリファレンス」を参照してください。

4. `clpcl -s -a` を実行して、CLUSTERPRO デーモンを再開します。

## アップロードしてからクラスタシャットダウン・再起動

1. `clpcl -t -a` を実行して、CLUSTERPRO デーモンを停止します。
2. Builder での構成情報作成時、マスタサーバに指定したサーバに構成情報を用意します。
3. 構成情報を、クラスタを構成するサーバに配信します。
  - A. Windows で構成情報を作成した場合、`-w` オプションをつけてコマンドを実行します。

```
clpcfctrl --push -w -x <構成情報のあるディレクトリパス>
```

以下のメッセージが表示されれば構成情報の配信は正常に終了しています。

```
The upload is completed successfully.(cfmgr:0)
To apply the changes you made, shutdown and reboot the cluster.
Command succeeded.(code:0)
```

clpcfctrl 実行時のトラブルシューティングについては『リファレンスガイド』の「第 4 章 CLUSTERPRO コマンドリファレンス」を参照してください。

4. 全サーバを再起動します。

## オフラインの Builder を使用する場合の注意事項

以下に オフラインの Builder を使用する場合の注意事項について説明します。

### クラスタ構成情報をアップロードするには

アップロードを実行するサーバから、ファイルシステム上に保存したクラスタ構成情報が参照できる状態にします。

FTP などを使用してマスタサーバ上でクラスタ構成情報が参照できるようにしてください。

Builder を使用する OS の種類によって以下のいずれかの手順になります。

クラスタ構成情報が /tmp/upload ディレクトリにある場合の例です。

1. Windows で Builder を実行して保存したクラスタ構成情報を使用する場合は、以下のコマンドを実行します。

```
clpcfctrl --push -w -x /tmp/upload
```

---

**関連情報:** clpcfctrl コマンドのオプションの詳細は『リファレンスガイド』の「第 4 章 CLUSTERPRO コマンドリファレンス」を参照してください。

---

### クラスタ構成情報をバックアップするには

Builder を使用する OS の種類によって以下のいずれかの手順になります。

バックアップ先が /tmp/backup ディレクトリの場合の例です。

1. Windows の Web ブラウザで動作する Builder 用にクラスタ構成情報をバックアップする場合は以下のコマンドを実行します。

```
clpcfctrl --pull -w -x /tmp/backup
```

---

**関連情報:** clpcfctrl コマンドのオプションの詳細は『リファレンスガイド』の「第 4 章 CLUSTERPRO コマンドリファレンス」を参照してください。

---



# セクション III 運用開始前のクラスタシステムの評価

このセクションでは、CLUSTERPRO の運用を開始する前に必須の評価作業を行います。構築したシステムの動作チェックを行った後、運用開始前に必要な事項について確認します。最後に、アンインストールおよび再インストールの手順について説明します。

- 第 8 章 動作チェックを行う
- 第 9 章 運用開始前の準備を行う
- 第 10 章 CLUSTERPRO をアンインストール/再インストールする





## 第 8 章           動作チェックを行う

本章では、擬似障害を発生させてクラスタシステムの動作チェックを行います。またパラメータの調整を行います。

本章で説明する項目は以下の通りです。

- 動作確認テストを行う..... 114
- バックアップ手順を確認する..... 117
- リストア手順を確認する..... 118

## 動作確認テストを行う

共有ディスクの疑似障害評価や、バックアップ リストアを実施して、モニタ リソースの異常検出や、サーバや OS の停止の発生等がないかを確認します。

モニタ リソースの異常検出や、サーバや OS 等が発生する場合には、タイムアウト値等の調整が必要です。

### 1. 共有ディスクの疑似障害

(共有ディスクが RAID 化されていて疑障評価が可能な場合)

共有ディスク サブシステムの RAID の障害、交換、復旧を想定したテストを行ってください。

- 共有ディスクの疑似障害を発生させる
- RAID を縮退状態から正常状態へ復帰する

共有ディスクによっては縮退運転への切り替え、RAID の再構築時に一時的に I/O の停止、遅延が発生する場合があります。

ディスク モニタなどにタイムアウトや遅延が発生した場合には各モニタ リソースのタイムアウト値を調整してください。

### 2. 共有ディスクへのパスの疑似障害

(共有ディスクへのパスが二重化されていて疑似障害評価が可能な場合)

パスの障害、切替を想定したテストを行ってください。

- プライマリ パスの疑似障害を発生させる

パス切り替えソフトウェア (ドライバ) によっては正常なパスが切り替わるまでに時間がかかり OS (ソフト) 側へ制御を戻さない場合があります。

ディスク モニタなどにタイムアウトや遅延が発生した場合には各モニタ リソースのタイムアウト値を調整してください。

### 3. バックアップ / リストア

定期バックアップなどを行う場合には、実際にバックアップを試行してください。

バックアップ ソフトやアーカイブ コマンドの中には CPU 負荷やディスクの I/O 負荷が高いものがあります。

サーバや OS の停止、ハートビート遅延、各種モニタ リソースの遅延やタイムアウトが発生した場合には、ハートビート タイムアウト値や各モニタ リソースのタイムアウト値を調整してください。

以下に、デバイス別の擬似障害と、発生する現象について記載します。

装置/リソース	擬似障害	発生する現象
共有ディスク装置 SCSI/FCパス	サーバ側ケーブルを抜く (二重化している場合は、両 方のケーブルを抜く)	ディスク監視をしている場合は待機系へフェイルオー バする。ディスクを監視していない場合は業務停止。
		ディスク ハートビートリソースがOFFLINEになる。 WebManager 端末へ警告 =業務は継続
		ディスクモニタリソースが異常検出
	FCの場合、FC-HUBの電源 OFFも実施	待機系へフェイルオーバ ディスク監視をしている場合、監視していない場合は 業務停止
		ディスク ハートビートリソースがOFFLINEになる。
		ディスクモニタリソースが異常検出
インタコネクトLAN	LANケーブルを抜く	パブリックLANを使用してサーバ間通信を継続 =業務は継続
		インタコネクト側のLANハートビートリソースが OFFLINEになる。 WebManager 端末へ警告 =業務は継続
		IPモニタリソースで異常検出 =待機系へフェイルオーバ
		NIC Link Up/Downモニタリソースで異常検出 =待機系へフェイルオーバ
パブリックLAN	LANケーブルを抜く、または HUBの電源OFF	通信断、アプリケーションストール／エラー =フェイルオーバ対象とならない。
		パブリック側のLANハートビートリソースが非活性にな る。 WebManager 端末へ警告 =業務は継続
		IPモニタリソースで異常検出 =待機系へフェイルオーバ
		NIC Link Up/Downモニタリソースで異常検出 =待機系へフェイルオーバ

装置/リソース	擬似障害	発生する現象
本体UPS	UPSのコンセントを抜く	現用系サーバがシャットダウン =待機系へフェイルオーバー
アレイUPS	UPSのコンセントを抜く	両サーバがシャットダウン =業務停止
UPS用LAN	LANケーブルを抜く	UPS制御不能 =業務は継続
COM	COMハートビートの RS-232Cケーブルを抜く	COMハートビートリソースがOFFLINEになる WebManager 端末へ警告 =業務は継続
OS障害	現用系でシャットダウンコマンドを実行	現用系サーバがシャットダウン =待機系へフェイルオーバー
ディスクリソース	ディスクをマウントした後で グループを起動する  (例) # mount /dev/dsk/c3t0d0s1 /mnt/disk	ディスクリソースが活性しない =待機系へフェイルオーバー
EXECリソース	EXECリソースのスクリプト に不正なコマンドを記述する スクリプトの最後にある 「EXIT 0」を「EXIT 1」に変更する	EXECリソースが活性しない =待機系へフェイルオーバー
フローティングIPリソース	既に使用しているアドレス (サーバで使用しているアドレス) を指定して、アドレスを 重複させる	フローティングIPリソースが活性しない
仮想IPリソース	既に使用しているアドレス (サーバで使用しているアドレス) を指定して、アドレスを 重複させる	仮想IPリソースが活性しない
NASリソース	ディスクをマウントした後で グループを起動する  (例) # mount -F nfs サーバ名:/シェア名 /mnt/nas1	NASリソースが活性しない
PIDモニタリソース	監視対象のEXECリソース の常駐プロセスを終了させる  (例) # kill プロセスID	待機系へフェイルオーバー

**関連情報:** 各パラメータの変更方法は『リファレンスガイド』を参照してください。

# バックアップ手順を確認する

クラスタシステムの運用開始前に、かならずバックアップの業務シミュレーションを行ってください。ファイル システムのバックアップは、以下の手順で行ってください。

## CLUSTERPRO 起動状態でのバックアップ

CLUSTERPRO デーモン起動状態でバックアップするには、以下の手順を実行してください。

1. クラスタの状態を正常状態にします。
2. ユーザ空間の高負荷によるハートビート タイムアウト等を防ぐためタイムアウト一時調整コマンドで CLUSTERPRO のタイムアウト倍率を変更します。

タイムアウトを現在の設定値の 3 倍にし、この設定の有効期間を 1 時間にする場合は、以下のようにコマンドを実行してください。

```
# clptoratio -r 3 -t 1h
```

3. 共有ディスクのバックアップ作業を行います。  
共有ディスクについては、グループ リソースのディスク リソースがバックアップするサーバで活性化されている必要があります。
4. タイムアウト一時調整コマンドで調整したタイムアウト倍率を元に戻します。

```
# clptoratio -i
```

タイムアウト一時調整コマンドの詳細については、『リファレンス ガイド』を参照してください。

## CLUSTERPRO 停止状態でのバックアップ

CLUSTERPRO デーモン停止状態でバックアップするには、以下の手順を実行してください。

1. クラスタの状態を正常状態にします。
2. CLUSTERPRO デーモンを停止します。

```
# clpcl -t -a
```

3. ファイル システム、共有ディスクのバックアップ作業を行います。  
共有ディスクについては、バックアップする共有ディスク上のファイル システムを手動で mount してください。  
また、バックアップ作業完了後、必ずファイル システムを umount してください。
4. CLUSTERPRO デーモンを起動します。

```
# clpcl -s -a
```

## リストア手順を確認する

クラスタシステムの運用開始前には、バックアップのほかにリストアの業務シミュレーションも必要です。ファイル システムをリストアするには、以下の手順を実行してください。

### /opt/nec/clusterpro のディレクトリを含むファイル システムのリストア

1. クラスタ内の正常なサーバでクラスタ構成情報をバックアップします。

```
# clpcfctrl --pull -w -x <構成情報を保存するディレクトリパス>
```

---

注: これ以降の手順については、リストアするサーバで実行してください

---

2. リストアするサーバで、`svccadm disable name` を実行して以下の順序でサービスを無効にします。
  - `clusterpro_alertsync`
  - `clusterpro_webmgr`
  - `clusterpro`
  - `clusterpro_trn`
  - `clusterpro_evt`
3. `reboot` コマンド等を使用して再起動します。
4. 復旧するサーバでファイル システムのリストア作業を行います (ここでのクラスタに依存する作業はありません)。
5. リストアしたファイル システムに CLUSTERPRO Server がインストールされているか以下のコマンドで確認してください。

```
pkginfo -l NECclusterpro
```

CLUSTERPRO Server がインストールされていれば、6 を実行してください。  
CLUSTERPRO Server がインストールされていなければ 7 から実行してください。

6. CLUSTERPRO Server がインストールされていれば、以下のコマンドを実行し、アンインストールします。

```
pkgrm NECclusterpro
```

CLUSTERPRO Server のアンインストールでのトラブルシューティングは、「CLUSTERPRO Server のアンインストール」を参照してください。

## 7. CLUSTERPRO Server をインストールします。

詳細はこのガイドの「第 3 章 CLUSTERPRO Server のセットアップ」を参照してください。

クラスタ内の他サーバで CLUSTERPRO Server のアップデートが適用されている場合は、このサーバにも同一のアップデートを適用し、クラスタ内の全てのサーバで同一のバージョンのCLUSTERPROがインストールされているようにします。

## 8. CLUSTERPRO Server を再インストールしたサーバに FD を挿入します。

**注:** CLUSTERPRO Server を再インストールしたサーバは、インストール後に再起動しておく必要があります。

## 9. リストアするサーバで、`svccadm enable name` を実行して以下の順序でサービスを起動します。

- `clusterpro_evt`
- `clusterpro_trn`
- `clusterpro`
- `clusterpro_webmgr`
- `clusterpro_alertsync`

## 10. 1 でバックアップしたクラスタ構成情報をクラスタ生成コマンドでサーバに登録します。

```
# clpcfctrl --push -w -x <構成情報のあるディレクトリパス>
```

```
Command succeeded. (code:0)
```

上記、コマンド終了メッセージが表示され、コマンドが正常に終了したことを確認してください。

**関連情報:** クラスタ生成コマンドの詳細については、『リファレンス ガイド』の「第 4 章 CLUSTERPRO コマンドリファレンス」を参照してください。

# 共有ディスクのデータのリストアを実行する

共有ディスクのディスクリソース上のデータをリストアする方法について説明します。

## CLUSTERPRO 起動状態でリストア

1. クラスタの状態を正常状態にします。
2. ユーザ空間の高負荷によるハートビート タイムアウト等を防ぐためタイムアウト一時調整コマンドで CLUSTERPRO のタイムアウト倍率を変更します。

タイムアウトを現在の設定値の 3 倍にし、この設定の有効期間を 1 時間にすることは、以下のようにコマンドを実行してください。

```
# clptoratio -r 3 -t 1h
```

3. 共有ディスクのリストア作業をおこないます。

リストアするサーバでグループ リソースのディスク リソースが活性化されている必要があります。

4. タイムアウト一時調整コマンドで調整したタイムアウト倍率を元に戻します。

```
# clptoratio -i
```

---

**関連情報:** タイムアウト一時調整コマンドの詳細については、『リファレンス ガイド』の「第 4 章 CLUSTERPRO コマンドリファレンス」を参照してください。

---



## CLUSTERPRO 停止状態でリストア

1. クラスタの状態を正常状態にします。
2. CLUSTERPRO デーモンを停止します。

```
# clpcl -t -a
```

3. リストアする共有ディスク上のファイル システムを手動で mount し、リストア作業を行います。また、リストア作業完了後、必ずファイル システムを umount してください。
4. CLUSTERPRO デーモンを起動します。

```
# clpcl -s -a
```

---

**関連情報:** クラスタ操作コマンドの詳細については、『リファレンス ガイド』の「第 4 章 CLUSTERPRO コマンドリファレンス」を参照してください。

---



## 第 9 章                    運用開始前の準備を行う

本章では、クラスタシステムの運用開始前に必要な事項について説明します。業務シミュレーションやバックアップ / リストア、および障害発生時のログ収集方法などについて説明します。

本章で説明する項目は以下のとおりです。

- 基本的な運用、操作手順を理解する ..... 124
- CLUSTERPRO を一時停止する..... 126
- ログ収集手順を確認する..... 127

## 基本的な運用、操作手順を理解する

クラスタシステムの基本的な運用手順について説明します。運用開始前に、これらを実際に行い、クラスタシステムが正しく動作するかを確認するとともに、正しい手順で操作ができるようにしておいてください。

クラスタ起動、クラスタシャットダウン、サーバシャットダウンに関しての手順を説明します。

### クラスタを起動する

以下の手順に従って、クラスタを起動してください。

1. 共有ディスクを使用している場合は、ディスクの電源を投入します。
2. クラスタを構成している全てのサーバの電源を投入します。

クラスタが起動します。

---

#### 注:

- ◆ クラスタ内の全てのサーバの電源投入は、Builder の [クラスタプロパティ]-[タイムアウト] タブで設定する [同期待ち時間] 内に行ってください。この時間内にサーバの起動が確認されない場合には、フェイルオーバーが発生するため注意してください。
  - ◆ 共有ディスクは、電源投入後数分間の時間をかけて初期化処理を行います。初期化処理中にサーバが起動すると、共有ディスクを認識できません。共有ディスクの初期化完了後、サーバが起動するように設定してください。詳細については 29 ページの「1. ボリュームマネージャリソース及びディスクリソース用の共有ディスクを設定する (ボリュームマネージャリソースまたはディスクリソース使用時は必須)」を参照してください。
-

## クラスタ シャットダウン、サーバ シャットダウンを実行する

クラスタのシャットダウンやサーバのシャットダウンは、CLUSTERPRO コマンドまたは WebManager を使用して行ってください。

### クラスタ全体をシャットダウンするには

clpstdn コマンド、または WebManager からクラスタ シャットダウンを実行することでクラスタをシャットダウンすることができます。クラスタ シャットダウンにより、クラスタ内の全サーバをクラスタとして正常に終了させることができます。

---

**関連情報:** clpstdn コマンドの詳細および WebManager の機能詳細については『リファレンス ガイド』を参照してください。

---

### サーバ単体をシャットダウンするには

clpdown コマンド、または WebManager からサーバ シャットダウンを実行することでサーバをシャットダウンすることができます。

サーバをシャットダウンするとフェイルオーバーが発生します。

ハードウェア保守時など、故意に待機系サーバに代替運転をさせたい場合などにサーバをシャットダウンさせます。

---

**関連情報:** clpdown コマンドの詳細および WebManager の機能詳細については『リファレンス ガイド』を参照してください。

---

## CLUSTERPRO を一時停止する

CLUSTERPRO の動作を停止する方法としては、CLUSTERPRO デーモンを停止する方法と、CLUSTERPRO デーモンを無効化する方法の 2 つがあります。

### CLUSTERPRO デーモンの停止

OS をシャットダウンしないで CLUSTERPRO デーモンだけを停止する場合、clpcl コマンドを使用します。

---

**関連情報:** clpcl コマンドの詳細については『リファレンス ガイド』を参照してください。

---

### CLUSTERPRO デーモンの無効化

OS 起動時に CLUSTERPRO デーモンが起動しないようにするには、svcadm コマンドで CLUSTERPRO デーモンを無効化できます。CLUSTERPRO デーモンを無効化するためには、CLUSTERPRO WebManager も無効化する必要があります。

CLUSTERPRO デーモンの無効化は以下の手順で行ってください。

1. デーモンを無効化するサーバ上で、svcadm disable **name** を実行して以下の順序でサービスを無効にします。
  - clusterpro\_alertsync
  - clusterpro\_webmgr
  - clusterpro
2. reboot コマンド等を使用して再起動します。

### 無効化した CLUSTERPRO デーモンを有効にする

無効化した CLUSTERPRO デーモンを再び有効化する時は以下の手順で行ってください。

1. デーモンを無効化したサーバ上で、svcadm コマンドを使用して以下の順序でサービスを有効にします。

以下のコマンドを実行してサービスを有効にします。

**svcadm enable name**

- clusterpro
- clusterpro\_webmgr
- clusterpro\_alertsync

# ログ収集手順を確認する

以下に WebManager を使用してログを収集する方法について説明します。

## WebManager を使用してログを収集するには

- 1. WebManager を起動します。  
タイトルビューで、[ログ収集] ボタンをクリックします。ログ収集ダイアログ ボックスが表示されます。

ログを収集するサーバとパターンを選択してください：

<input checked="" type="checkbox"/>	サーバ名	パターン
<input checked="" type="checkbox"/>	server1	パターン1
<input checked="" type="checkbox"/>	server2	パターン1

OK    キャンセル    情報    デフォルト

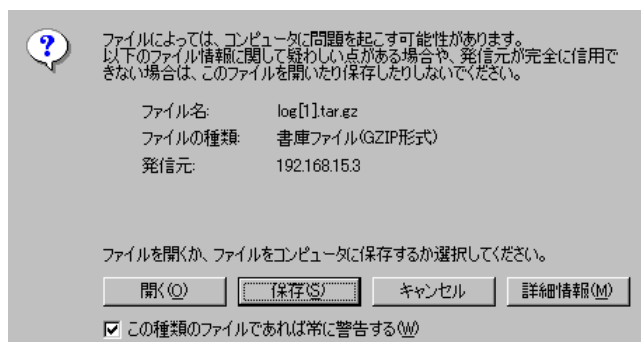
- 2. ログを収集したいサーバのチェックボックスを選択し、収集するログのパターンを選びます。  
パターンの詳細を見るには、[情報] ボタンを、設定を既定値に戻すには、[デフォルト]をクリックします。
- 3. [OK]をクリックします。ログ収集が開始されログ収集進捗ダイアログ ボックスが表示されます。

サーバ名	接続IPアドレス	ステータス	進捗状況	結果
server1	192.168.0.1	送信中	71%	正常
server2	192.168.0.2	送信中	83%	正常

更新    中止    閉じる

ログ収集進捗に進捗状況が表示されます。最新の状態に更新するには[更新] をクリックします。

4. ログ収集が完了すると、ブラウザのダウンロード保存ダイアログ ボックスが表示されるので、保存場所を指定しログをダウンロードします。



(\* Internet Explorer 6.0 SP1 の場合)

---

**注:** この状態のまま 10 分以上経つと、正常にダウンロードできないことがあります。

**注:** ログ収集中に、他のモーダルダイアログ ボックスを表示していると、ログ収集のファイル保存ダイアログ ボックスが表示されません。ログ収集のファイル保存ダイアログ ボックスを表示するには、他のモーダルダイアログ ボックスを終了してください。

---



## 第 10 章      CLUSTERPRO をアンインストール/再インストールする

本章では、CLUSTERPRO をアンインストール/再インストールする手順について説明します。

本章で説明する項目は以下のとおりです。

- アンインストール手順 ..... 130
- 再インストール手順 ..... 132

## アンインストール手順

### CLUSTERPRO Server のアンインストール

---

注: CLUSTERPRO Server のアンインストールは、必ず root 権限を持つユーザで実行してください。

---

以下の手順に従って、CLUSTERPRO Server をアンインストールします。

1. `svcadm disable name` を実行して、以下の順序でサービスを無効にします。
  - `clusterpro_alertsync`
  - `clusterpro_webmgr`
  - `clusterpro`
  - `clusterpro_trn`
  - `clusterpro_evt`
2. `pkgrm NECclusterpro` を実行します。
3. `reboot` コマンド等を使用して再起動します。

## オンライン版 CLUSTERPRO Builder の Java のユーザポリシファイル設定の削除

以下の手順に従って、Java のユーザポリシファイル設定を削除します。

1. Builder のインストール時にホームディレクトリに追加した .java.policy ファイルを削除します。.java.policy ファイルの設定時の手順については、「第 5 章 Builder でクラスタ構成情報を作成する」の「Builder を起動する」を参照してください。

## オフライン版 CLUSTERPRO Builder のアンインストール

### Windows の場合

以下の手順に従って、CLUSTERPRO Builder をアンインストールします。

1. Web ブラウザをすべて終了します (タスクトレイから JavaVM のアイコンが消えるのを確認してください)。
2. エクスプローラで、CLUSTERPRO Builder をインストールしたフォルダを削除します。
3. Java のユーザポリシファイル設定を削除します。  
インストール時に追加した CLUSTERPRO Builder の設定を、ホームディレクトリの .java.policy ファイルから削除します。CLUSTERPRO Builder の設定については、『リファレンスガイド』の「第 3 章 Builder の機能」を参照してください。

## 再インストール手順

### CLUSTERPRO Server の再インストール

CLUSTERPRO Server を再インストールする場合、Builder で作成した構成情報(構成変更を行った場合は最新の構成情報) が必要です。

Builder で作成した構成情報 (構成変更を行った場合は最新の構成情報) がない場合は、clpcfctrl コマンドでバックアップを作成できます。詳細は『リファレンスガイド』の「第 4 章 CLUSTERPRO コマンドリファレンス」を参照してください。

#### クラスタ全体を再インストールする場合

以下の手順に従って、CLUSTERPRO Server を再インストールします。

1. CLUSTERPRO Server をアンインストールします。  
詳細は、「CLUSTERPRO Server のアンインストール」を参照してください。
2. CLUSTERPRO Server をインストールしてクラスタを再生成します。  
詳細は「CLUSTERPRO Server のセットアップ」を参照してください。

#### クラスタ内の一部のサーバのみ再インストールする場合

以下の手順に従って、CLUSTERPRO Server を再インストールします。

1. CLUSTERPRO Server をアンインストールします。  
詳細は「CLUSTERPRO Server のアンインストール」を参照してください。
2. CLUSTERPRO Server のパッケージをインストールします。  
詳細は「CLUSTERPRO パッケージをインストールするには」を参照してください。

---

**注:** CLUSTERPRO Server を再インストールしたサーバはインストール後、再起動しておく必要があります。

---

3. CLUSTERPRO Server を再インストールしなかったサーバから再インストールしたサーバに構成情報を配信します。  
クラスタ内の再インストールしなかったサーバのいずれか 1 台に root でログインします。  
以下のコマンドを実行します。

```
clpcfctrl --push -h <再インストールしたサーバのホスト名>  
または  
clpcfctrl --push -h <再インストールしたサーバの IP アドレス>
```

配信が正常に終了した場合、以下のメッセージが表示されます。  
Command succeeded. (code:0)

---

**注:** clpcfctrl 実行時のトラブルシューティングについては『リファレンスガイド』を参照してください。

---

4. 再インストールするサーバでノードライセンスのオプションを使用する場合には、ライセンスを登録します。  
再インストールするサーバでノードライセンスのオプションを使用しない場合には、この手順は不要です。  
詳細は「ノードライセンスの登録」を参照してください。
5. 再インストールを行ったサーバを再起動します。



## 付録 A                    トラブルシューティング

### CLUSTERPRO Server のインストール時

	エラーメッセージ	原因	対処
1	pkgmgr: ERROR: You must be "root" for pkgmgr to execute properly.	root権限を持つユーザではありません。	root権限を持つユーザで実行してください。

### CLUSTERPRO Server のアンインストール時

	エラーメッセージ	原因	対処法
1	pkgmgr: ERROR: You must be "root" for pkgmgr to execute properly.	root権限を持つユーザではありません。	root権限を持つユーザで実行してください。
2	error: CLUSTERPRO is running	CLUSTERPROが起動しています。	svcadmでサービスを無効にして再度アンインストールを実行してください。

## ライセンス関連のトラブル シューティング

動作及びメッセージ	原因	対処
コマンド実行後、以下のメッセージがコンソールに出力された。 「Log in as root.」	一般ユーザでコマンドを実行しています。	root でログインするか、su - で root に変更後、再度実行してください。
ライセンス登録でコマンド実行後、以下のメッセージがコンソールに出力された。 「Command succeeded. But the license was not applied to all the servers in the cluster because there are one or more servers that are not started up.」	CLUSTERPROのデータ転送サービスの未起動又は、クラスタ構成情報の未配信の可能性があります。	全サーバでのトランザクション サーバ起動、クラスタ構成情報の配信がされているか、再度確認してください。もし、どちらかが未完了であれば、完了後、再度ライセンスの登録を行ってください。
Builder で作成したクラスタ構成情報を全サーバに配信後、クラスタ シャットダウン リポートを行うと、WebManager のアラート ビューに以下のメッセージが表示され、クラスタが停止した。 「The license is not registered. (%1)」 %1: 製品 ID	ライセンスを登録せずにクラスタ シャットダウン リポートを実行したためです。	クラスタ内のどれか 1台のサーバからライセンス登録を実行してください。
Builder で作成したクラスタ構成情報を全サーバに配信後、クラスタ シャットダウン リポートを行うと、WebManager のアラート ビューに以下のメッセージが表示されていたが、クラスタは、正常に動作している。 「The license is insufficient. The number of insufficient is %1. (%2)」 %1: ライセンス不足数 %2: 製品 ID	ライセンスが不足しています。	販売元からライセンスを入手し、ライセンスを登録してください。
試用版ライセンスでクラスタ運用中に以下のメッセージが出力され、クラスタが停止した。 「The license of trial expired by %1. (%2)」 %1: 試用終了日 %2: 製品 ID	ライセンスの有効期間を超えています。	販売元へ試用版ライセンスの延長を申請するか、製品版ライセンスを入手し、ライセンスを登録してください。



## 付録 B 用語集

### あ

**インタコネクト** クラスタ サーバ間の通信パス  
(関連) プライベート LAN、パブリック LAN

### か

**仮想IPアドレス** 遠隔地クラスタを構築する場合に使用するリソース (IPアドレス)

**管理クライアント** WebManager が起動されているマシン

**起動属性** クラスタ起動時、自動的にフェイルオーバーグループを起動するか、手動で起動するかを決定するフェイルオーバーグループの属性  
管理クライアントより設定が可能

**共有ディスク** 複数サーバよりアクセス可能なディスク

**共有ディスク型クラスタ** 共有ディスクを使用するクラスタシステム

**切替パーティション** 複数のコンピュータに接続され、切り替えながら使用可能なディスクパーティション  
(関連) ディスクハートビート用パーティション

**クラスタ システム** 複数のコンピュータを LAN などをつないで、1 つのシステムのように振る舞わせるシステム形態

**クラスタ シャットダウン** クラスタシステム全体 (クラスタを構成する全サーバ) をシャットダウンさせること

**現用系** ある 1 つの業務セットについて、業務が動作しているサーバ  
(関連) 待機系

### さ

**セカンダリ (サーバ)** 通常運用時、フェイルオーバーグループがフェイルオーバーする先のサーバ  
(関連) プライマリ サーバ

## た

待機系	現用系ではない方のサーバ (関連) 現用系
ディスクハートビート用パーティション	共有ディスク型クラスタで、ハートビート通信に使用するためのパーティション
データパーティション	共有ディスクの切替パーティションのように使用することが可能なローカルディスク

## な

ネットワークパーティション	全てのハートビートが途切れてしまうこと (関連) インタコネクト、ハートビート
ノード	クラスタシステムでは、クラスタを構成するサーバを指す。ネットワーク用語では、データを他の機器に経由することのできる、コンピュータやルータなどの機器を指す。

## は

ハートビート	サーバの監視のために、サーバ間で定期的にお互いに通信を行うこと (関連) インタコネクト、ネットワークパーティション
パブリック LAN	サーバ / クライアント間通信パスのこと (関連) インタコネクト、プライベート LAN
フェイルオーバー	障害検出により待機系が、現用系上の業務アプリケーションを引き継ぐこと
フェイルバック	あるサーバで起動していた業務アプリケーションがフェイルオーバーにより他のサーバに引き継がれた後、業務アプリケーションを起動していたサーバに再び業務を戻すこと
フェイルオーバー グループ	業務を実行するのに必要なクラスタリソース、属性の集合
フェイルオーバー グループの移動	ユーザが意図的に業務アプリケーションを現用系から待機系に移動させること
フェイルオーバー ポリシー	フェイルオーバー可能なサーバリストとその中でのフェイルオーバー優先順位を持つ属性
プライベート LAN	クラスタを構成するサーバのみが接続された LAN (関連) インタコネクト、パブリック LAN

---

プライマリ (サーバ)	フェイルオーバーグループでの基準で主となるサーバ (関連) セカンダリ (サーバ)
フローティング IP アドレス	フェイルオーバーが発生したとき、クライアントのアプリケーションが接続先サーバの切り替えを意識することなく利用できる IP アドレス クラスタサーバが所属する LAN と同一のネットワーク アドレス内で、他に使用されていないホスト アドレスを割り当てる

## ま

マスタサーバ	Builder の [クラスタのプロパティ]-[マスタサーバ] で先頭に表示されているサーバ
--------	--



# 付録 C 索引

## B

Builder のアンインストール, 131  
**Builder のインストール**, 54  
Builder の起動, 67, 71, 131  
Builder の動作環境の確認, 15, 26

## C

CLUSTERPRO, 15, 18  
CLUSTERPRO Server のセットアップ, 53  
CLUSTERPRO デーモン, 126  
CLUSTERPRO モジュール別の動作環境の確認, 15, 23  
CLUSTERPRO 本体 RPM のインストール, 54, 132  
CLUSTERPRO 本体のアンインストール, 130  
CLUSTERPRO 本体の再インストール, 132  
CPU ライセンスの登録, 58

## J

Java 実行環境の設定, 70

## O

OS 起動時間の調整, 31

## W

WebManager, 69  
WebManager の起動, 67, 69, 70  
WebManager の動作環境の確認, 15, 27  
WebManagerの再起動, 103

## あ

アップロード, 103, 105  
アンインストール, 129, 130

## い

一時停止, 123, 126  
インストール, 54, 132  
インストールからクラスタ生成までの流れ, 52

## う

運用形態, 35, 37

## お

オフライン版CLUSTERPRO Builderのインストール, 54

## か

片方向スタンバイクラスタのフェイルオーバー, 38

## き

共有ディスクのデータのリストア, 119  
共有ディスク方式, 20

## く

クラスタ シャットダウン, 125  
クラスタ環境のサンプル, 72  
クラスタ構成情報のアップロード, 109  
クラスタ構成情報の作成, 67, 68, 75  
クラスタ構成情報のバックアップ, 109  
クラスタ構成情報の反映, 102  
クラスタ構成情報の変更, 97, 98, 101  
クラスタ構成情報の保存, 67, 89  
クラスタ構成の設計, 35, 43  
クラスタシステムの設計, 36  
クラスタシャットダウン・再起動, 107  
クラスタの起動, 124  
クラスタの作成, 77  
クラスタの生成, 67, 88, 90  
クラスタの追加, 75, 77  
クラスタの動作確認, 92, 94  
グループの追加, 82, 84  
グループリソース, 35, 44  
グループリソースの追加, 84, 85

## こ

コマンド ラインからの対話形式でのライセンス登録, 58, 60, 62, 64

## さ

サーバ シャットダウン, 125  
サーバの時刻の同期, 34  
サーバの追加, 78, 80  
再インストール, 129, 132  
再起動, 104, 107  
サスペンド・リジューム, 103, 106  
サポートしているブラウザ, 69

## し

システム構成例, 15, 20  
シャットダウン, 104, 107

## せ

設定値の確認, 67, 72

## そ

双方向スタンバイクラスタフェイルオーバー, 39  
ソフトウェア構成, 19

## ち

注意事項, 40

## て

停止・再開, 103, 105, 107  
ディスクリソース用の共有ディスクを設定する, 29, 124  
データミラー方式, 20

## と

動作確認, 92, 94  
動作確認テスト, 113, 114  
動作環境, 15, 23, 26, 27  
トラブルシューティング, 135

## に

二重化するアプリケーション, 35, 40

## ね

ネットワーク設定の確認, 32  
ネットワークパーティション解決リソース, 35, 48

## の

ノードライセンスの登録, 62

## は

ハードウェア構成, 15, 28  
ハードウェア構成後の設定, 29  
ハードウェア構成例, 25  
ハートビートリソース, 35, 47  
バックアップ, 117  
バックアップ手順の確認, 113, 117

## ふ

ファイアウォールの設定の確認, 33  
ファイル システム, 118  
ファイル システムへ保存, 89  
フェイルオーバー, 38, 39  
ブラウザ, 69

## む

無効化, 126

## も

モニタリソース, 35, 45  
モニタリソースの追加, 87

## ら

ライセンス ファイル指定でのライセンス登録, 58, 59,  
62, 63  
ライセンスの登録, 58

## り

リストア手順, 113, 118

## る

ルート ファイル システムの確認, 32

## ろ

ログ収集, 123, 127